春の流

279
74.c

始

露光量違いの為重複撮影

帝國圖書館
特102
282

大 8 2.15 内

露光量違いの為重複撮影

特102
282

大8内

春の流（前篇）

佐藤紅綠著

一

淡藍色に晴れ渡つた空に朝の光が漲つて、輕い雲の中から威勢の好い雲雀の行進曲が聞える。茲は立川のほとり、多摩川の流は爽々しい綠の野や丘の間を蜿つて、遙かに又綠の丘の間に隱れる。雲母の様な光の躍る小波の上にスラ〳〵と朝風が渡ると、岸邊の小さな草の花までが嬉しさうに水鏡をして笑つて居る。

欣一は今日も堤を下りて、川柳の一簇繁つた中に腰を据ゑて寫生に餘念がない。紺絣の筒袖の臂を捲りあげて、乏しい繪具を溶き混ぜてはスケッチ板

に塗り付ける。彼れは今年十八である。頭を坊主の樣に一分刈にして、色は淺黑いが清しい眼、引締つた口元、一の字に引いた眉の稍迫つてるのは神經質らしいが、ボッテリとした頬に子供らしい無邪氣さも見える。

欣一が今寫生しやうと云ふのは、對岸の綠の丘の彼方に、紗の樣な靄に糢された甲州の山々の景色である。然し思ふ樣に色が出ないと見えて、彼れは時々刷毛の手を止めて、

『ちよッ、駄目だ』と、獨りで舌打ちをする。

頭の上の柳に鶸や四十雀が高音を切つては、ツイと向ふの樹に飛び去る。其の度びに未だ乾かぬ朝露が音もなく若草の上にこぼれた。と、堤の上に優しい唱歌の聲が聞える。

　友よぶ雲雀の　　あがる野べに
　にほへる菫の　　あかぬ色よ….

晴やかに愛らしく唄ふ聲を、欣一は始め小鳥の囀りかと思つた。聞くともなく耳を傾けて居ると、唱歌は次第に近づいて來る。

『あゝ別莊のお孃樣だ』爾思ひながら、欣一はスケッチ板の上に濃い綠の色を塗つた。

　ふく風すゞしき　　山のかげに
　咲きたるなでしこ

琴糸の切れた樣に歌がふッと歇んだと思ふと、

『あら、貴方は今日も此處に來てるわね』

聲をかけて欣一の背後に寄つたのは、十五六の少女である。繚々とした髮を二つに分けて耳の所で結び、片手を輕く頬のあたりに當てながら仇氣なさうに丸い顏を傾げる。

『僕は毎日來て居るんだ』と欣一は刷毛を持つた儘、凝と山の色を見詰めな

から云ふ。

『毎時繪ばかり描いて居るの』

『爾さ、此處の景色は廣いから好い寫生が幾枚だつて撮れるんだよ』

『隨分熱心だことね』

『お嬢さんは畫は好きかえ』と欣一は振り向いた。

『爾ね、綺麗な畫なら私好きだわ』

『はゝゝゝ』と欣一は笑つた。

『繪畫は美術なんだからな、綺麗だつて汚なくたつて皆な美的觀念が表現されたものだ』

『ほゝゝ、欣一さんは理窟が好きね』と少女は紅い柔かな口元を綻ばして、

『だつて、上手なのもあれば拙なのもあるでせう』

『其りやあるさ、ぢや僕の畫を由美子さんは什麼思ふの』

『あら、隨分青い畫だわ』と少女は寫生を覗き込んで、

『是は海でせうか』

『馬鹿を云つてらア、丘ぢやないか』

『あゝ爾々、巧いわ、此間のよりも餘程上手に出來てよ。だつて此間のは變ね、ポプラの樹だなんて全で箒に青い袋を冠せた樣だもの、私可笑しかつたわ』

『話せないな、あれは印象畫なんだよ』

『ほゝゝゝ、だつて可笑しいわ』

由美子は印象畫が何であらうと頓着なしに、此頃の畫を思ひ出してコロコロ笑つた。餘り笑はれるので、欣一も稍含羞んだ顏をして、

『あれは少し光線が強過ぎたけれども、先のは素的に好かつたんだ、お嬢さんが破つちまつたから僕は落膽したよ』

『あら、私が破つたのでないわよ、ジャックが惡いのだわ』と濟まなさうに云ふ。

『今日は彼の犬を連れて來ないんだね』

『惡戲で仕樣がないから、別莊のお庭に縛つてやつたの』

由美子は馴々しく欣一と並んで柔かな若草の上に尻を据ゑ、護謨草履を穿いた眞白な足を前に伸ばしながら、傍へに咲いた菫の花を摘んで、唇に當てたり匂を嗅いだりして居る。欣一は其の無邪氣な口元や、人形の樣な丸い足を眺めて『大變に美的だ』と思つた。

彼は此の少女が好きであつた。東京の牛込あたりの財産家の娘で、一月ばかり前から此立川の別莊へ遊びに來て居る。始め飼犬のジャックが自分の寫生畫に飛びかゝつて滅茶々々にしたのが緣で、其後自分が此の堤に來て寫生をして居る所へ由美子は時々散歩に出て來る。少女の快活な動作や、小鳥の

囀る樣な樂しい話し振が、何となく彼に快感を與へて、つい釣り込まれては愉快に話すのである。

『彼の時は私本當に驚いたわ』と、少女は睫毛の深い水々とした眼を笑ませて、『ジャックが唐突に飛び付いて、貴方の畫をひつくり返して了つたでせう貴方は眞赤な顏をして眼を剝いて私に呶鳴るんだもの、私最う少しで泣き出しさうになつたわ、まア隨分可怖ない人だと思つたわ。だけれども貴方は思つたよりか和しいわね』

『僕は意氣地なしだ』と、欣一は急に情なさうに首を振つた。

『おや什麼して？』

『僕はね、男の癖に氣が弱いから駄目だ』

『だつて亂暴よりか和しい方が私好きよ』

『いや、好きの嫌ひのと云ふ事ではない、僕はね畫を習ふには東京へ行かな

くては駄目なんだけれども、什麽しても思切つて行かれないんだもの。僕は何故恁那に意志が弱いのだらう』と悄れる。

『爾、欣一さんは東京へ行きたいの』

『東京でなければ思ふ樣に畫の研究は出來やしない』

『お父さんに願つて遣つて貰へば可いわ』

『僕の家は禪宗のお寺だらう、然しお父さんは僕を坊主にする意りではないんだ、だから始めから名前だつて坊主の名前でないのだけれども、何しろ貧乏だから駄目さ』と欣一は溜息をした。

『貧乏だと東京へ行かれなくつて』

『費用がなければ勉強は出來ないよ、今だつて思ふ樣に繪具を買つて貰へないもの』

『お父さんが買つて下さらなければ、お母さんに願へば可いわ』

其の無邪氣な言葉に、欣一は思はず微笑を漏らしたが、

『僕にはお母さんがありやしない』

『あらお母さんが無いの、死んでお了ひなすつたの』

『僕が生れた時に、お母さんは直ぐに病氣で死んだのだつて』

『まア、詰らないわねえ』と、由美子は美しい眼に同情の色を浮べて彼の顏を凝と見詰めた。

『可いわ、私が繪具を買つて上げてよ』と慰める樣に云ふ。

『けれども中々高いんだから』

『私のお小遣ひは一月に五圓と定めてあるのよ、五圓では繪具が買へなくつて？足りなければお母さんに願つて最と頂くわ』

欣一は默つて少女の顏を眺めた。自分は五十錢の繪具代さへ容易に貰へないのに、年下の此の少女が月々五圓の小遣と云ふのに彼は驚いたのである。

其那お錢を何に遣ふのだらうと不思議の樣に思ひ、何となく羨ましい樣な氣もした。

『ね、だから私と一緒に東京に被來いよ』と由美子が勸める。

『駄目だ』と欣一は頭を振つた。『僕等の樣な貧乏人がお孃さんと一緒に行かれるものか、金持と云ふものは幸福だなァ』

彼は歎息する樣に云つたが、軈て急に首を起して、『爾だ、僕は金が無くても構はないから東京へ行かう、僕は決心した。東京へ行つて苦學をして勉强すれば可いんだ』

『欣さんが東京さ行くなら俺らも行くべいかな』

不意に背後から恁う云つた者がある。二人は吃驚して振り向いた。低く毬の樣に繁つた野茨の向ふにヒョックリと一人の若者が立つた。年は十八九で背が低く顏は赤銅色に黑く顎が沙魚の樣に角張つてるが、尻下りの眉と眼に

氣の好さゝうな笑を浮べて居る。威勢好く尻端折をして腰に大きな草籠を括り付け片手に鎌を持つて居る。

『猪之公か、草刈に來たのか』と欣一が云ふ。

『唐突に喫驚するぢやないの』由美子は淸しい眼を瞠つた。

『あはゝゝゝ』と猪之吉は笑つて、『別莊のお孃さんと欣さんと仲が好いだな二人で夫婦になつたら可かんべえ』

『あら可厭アだ、隨分だわ』

『そーら、お孃さんが顏を赧くしたゞ』

『可くつてよ、彼那こと云ふから私もう行くわ』と、由美子は揶揄はれたのでポッと顏を赧らめ、腹を立つた樣に立ち上つて、兩方の袂をヒラリと振りながら去らうとする。

『おつと〳〵、行くでねえだよ』と、猪之吉は慌てゝ前に立ち塞がる。

『行くわ〳〵、だつて彼那ことを云ふんだもの』
『そんでは最う云はねえよ』
『屹度云はないの』
『云はねえだ』
『詫まるの』
『詫まらねえけれども、云はねえだよ』と猪之吉は兩手を擴げて首を振つた。
『ほゝゝゝ』と由美子は急に笑ひ出して、『隨分剛情だわ、何故詫まらないの』
『俺ら人に詫まることは嫌えだからな、首を捩られても詫まらねえだよ』
『面白い人だこと、可いわ、勘忍して上げるわ』と、由美子の方から打解けて了つた。
二人の諍り合つて居る様子が可笑しかつたので、欣一は笑つた。然し、悉

那些細な事にも剛情な猪之吉の氣性と、由美子の洒ぱりとした和しい氣立を彼れは窃かに感心した。猪之吉は欣一の家に使はれて居る寺男久七の伜で、二人が同じ歳であるし、幼い時から母のない欣一は猪之吉の母の乳房を右と左に分けられて育つた。それで、此の二人は主従の様に兄弟の様に親しい友達である。
『何時東京に行くかい、欣さん』と、猪之吉は傍に寄つて草の中にドッカリと尻を据ゑる。
『僕はお父さんに願つて見なければ分らないけれども……』
『早い方が可いよ、お住持さんが許して呉んなさらなけりや逃げ出して行くべい、俺らも一緒に行くよ』
『そして猪之吉さんは東京で何に成るの』と由美子は含笑む。
『爾だな、欣さんが畫家になれば、俺ら車夫でも八百屋でも何でもやつて欣

さんの學問を助けてやるべい』
『まア感心だわね、其れでは私も欣さんを助けて上げてよ』
二人に爾云はれて欣一の心は自づと興奮した。
『猪之公、僕は明日行くことに定めた。僕は一生懸命に研究して屹度大家になつて見せる』と、彼れは希望に滿ちた眼を輝かした。
『お前は悧巧だから今に日本一の畫家になるべい』
『ほゝゝ、爾したら猪之吉さんが日本一の八百屋さんになると可いわ』
三人は面白さうに聲を合はして笑つた。其時、下駄の音靜かに堤の上に現はれた婦人がある。丸髷に結つた細面の顔は病身らしく青白いけれども、三十二三歳と見ゆる瘦形の體に大島の被布を着た品が好い。
『あらお母様』と、由美子は目早く呼んだ。
『お前恁那所に何をしてお居でなの』と、夫人は輕く笑みながら傍に降りて

來る。
『今ね、此の人達が東京に行かうと云つて相談をして居ますの、欣一さんは畫家になるんですつて。ねえお母さん、此の人達を一緒に東京へ連れて行つて上げませうよ』
『ほゝゝ何をお云ひだ、其那事をすれば此の人のお母さんに怒られるぢやないの』
『いゝえ、欣一さんはお母様がないんですつて』
『爾、お母さんがなければお父さんに叱られます』
云ひながら、夫人は見るともなく欣一を見たが、何と思つたか引付けられる樣に凝と顔を眺めた。と、夫人は急に何物かに襲はれた樣な不安な眼色をして後に退つた。
『由美さん、さあもうお家へ歸りませう』

其の唇が微かに顫へてゐた。

二

立川の村端れ、雑木の若葉の暗く繁つた中に瑞念寺といふ禪寺がある。別に由緒も何もない有りふれた田舍寺で、小棟建の古い本堂と廣くもない庫裡とが淋しく並んで居る。これが欣一の家である。

和尚の良道は夕方前から檀家の法事に詣つて留守なので、欣一は寺男の久七爺と共に雑作もない夕飯を濟ました。彼は未だ東京行きの件を和尚に云ひ出さない。今夜は是非とも許しを得る心算で、什麼切り出したら可からうと其事ばかり頻りに考へて居る。

『欣さま、默り込んで何考へて居さつしやるだ、情婦にハア子供でも出來たたか』と久七は竈端に坐つて、鉈豆煙管でスパ〳〵莨を吸ひながら云つた。

『詰らない事を云ふものでないよ』

『はゝゝ大方其の邊だべい、欣さまも最う好い若え衆だからな、こうつと幾歳にならつしやるけな』

『幾度聞くだらう、十八ぢやないか』と、欣一は面倒臭さうに云ふ。

『おゝ爾だつけ、俺が猪之と同え年だからな、爾々、家の婆さんの乳房を二人が奪ひ合つて飲まつせいたのは、つい此頃の樣に思ふが、人間の育つのは早えもんだな』と久七は今更の樣に首を振つた。

『爺や、猪之公を東京へ出してやりなさいよ』

『え、東京へ』と爺は怪訝な顏をして、『彼の木偶坊を東京さ何しに遣るだかね』

『僕と一緒に行かうと相談を決めたんだ、だから今夜僕はお父さんに願つて是非許して貰ふのだ』

『お前さんは東京が戀しくなつたゞか』
『親戚も何もないのだから戀しいと云ふ事はないけれども、僕は苦學をして勉强するのだよ』
『東京で生れたものは、仍且東京が戀しくなるだ』
『え、誰が東京で生れたつて？』
『お前さんがさ』
『え、僕が……』と欣一は思はず眼を瞠つた。
『はゝゝ、お前さん未だ何も知んなさらねえだな』と久七は何か云はうとしたが、急に首を振つて、『いや知んなさらねえが可い、俺も云ふめえ、餘計な事んだ』
『何だか爺やの云ふ事は分らない、僕が什麼して東京で生れたの』
『いや聞かつしやるな、聞けば煩惱の種と云ふだからな、はゝゝ』と紛ら

す樣に笑つて、煙管を筒に入れてグイと腰に挿すと、
『ドレ、其れぢあ俺はお暇としべい、和尚さま追付け歸らつしやる時分だ、早う寢さつせいよ』
　云ひながら久七は裏口から歸つて行く。此の爺は朝早く寺に來て曉の鐘を撞き、夕飯を食べると我家へ寢に行くのである。跡に欣一は獨り火鉢の傍に坐つて居たが、今云つた久七の言葉が何となく不審に思はれてならない。
　猪之吉と一緒に久七爺の女房の乳を爭つて飮んだことは、ぼんやりと記憶に殘つて居る。然し、自分の生みの母が什麼人であつたかは、如何に思ひ出さうとしても、微かな記憶もない。『東京で生れたものは仍且東京が戀しくなるだ』と云つた久七の言葉――して見ると自分は東京で生れたのであらうか恁那事を聞くのは今始めてゞある。是まで欣一は十幾年の間、父の和尚から曾つて其れらしい話も聞かされた事がない、自分は此の寺で生れて此の寺に

育つて來たものとのみ信じて居た。

そこへ偶とした久七の一言は、欣一の爲めに非常な驚きである。其那事を今日迄少しも念頭に置かなかつた丈けに、彼の驚きは一層深かつた。恰も曾て知られない彗星が忽然として天空に現はれた時、科學者の學説が一度に覆へされて、天體と云ふものが根底から解らなくなつて了ふのと同じである。『自分は東京に生れたのだ』と云ふ事は、欣一の心に思ひ掛けない彗星が現はれた樣なものだ。其の一つの事實を知らずに居た事に驚くと共に、是までの自分の身上には甚麼重大な事實があつて、其れを自分は何にも知らずに居るのでないかと怪しまれる。

爾う考へると、欣一の胸には啻ならぬ不安と疑惑が雲の如く湧いて來る。『自分が東京で生れたとすれば母は東京の人であらう』と彼は考へ出す。『自分が生れると直ぐに亡くなつたとしても、其の母の居た家が今も彼地にある

のかも知れない、東京が戀しくなつたかと久七爺が云つたのを見ても、母と自分は東京と云ふものに何か因縁があるに違ひない。自分が生れた事を今迄父は語らない通り、母の事も譯があつて隱して居るのであるまいか』

兎も角も、其處に自分の知らない種々の事情がある樣に思へる。知らないと云ふのは不安の事である、悲しい事である、殊に自分自身が生れたことや母のことさへ明かに知らない程情ない事があらうか……

『是非訊ねて見よう、お父さんが歸つたら直ぐに聞かなければならない』と欣一は心に決めた。

東京行きの望より彼は急に其事に心を奪はれて、父の歸りを待遠しく思つた。其れを確めるのが何か非常に樂しい樣な氣もする、また不安の樣な氣もする、欣一は母と東京とを結び付けて、種々な取止めのない想像をめぐらした。

程なく良道和尚は檀家から歸つて來た。背の低いデツプリと肥つた和尚は未だ五十前後の健かな顔をして、細長い眼に毎時も柔和な笑を湛へて居る樣に見える。法衣の包を奥の居間に置いて、大きな掌で頰を撫でながら寛たりと火鉢の傍へ坐る迄に、欣一は大變に長い時間が過ぎた樣に思つた。

『欣一、お前東京へ行くのか』と、和尚は膝を据ゑると直ぐに云ひかけた。

『え……』欣一は少し面喰らつた樣。

『今久七に聞いたよ、東京へ畫の修業に行くか』

『はい、其の事をお願ひしやうと思つたのですが……』と彼は稍逡巡しながら、『お父さん、其れよりも先に私は聞きたい事があります』

『什麽事だ』

『私は東京で生れたのですか』

『うむ』と和尚は簡單に頷いた。

『お母さんは本當に死んだのですか』

『唐突に妙な事を訊き出したな、死んだから位牌になつて居るよ』

『然し、私はお母さんの事を何にも知りません、お母さんは什麽人だつたか聞かして下さい』

『爾うか、お前は其那事を考へ出したか』

恁う云つて良道和尚は欣一の顔を凝と眺めながら、嘆息する樣な息を漏らした。軈て深く頷いて、

『可し〳〵聞かしてやらう、お前の心に爾いふ疑ひが起つたとすれば、隱して置いても無駄な事だ、今夜は何も彼もお前に話してやらう』

『はい』と欣一は唾を呑み込んだ。今自分の前に大切な祕密の箱が開かれる樣な心地で、我にもなく胸を轟かした。

『欣一、母の事を話す前に聞かして置くが、お前は實は俺の子ではないのだ』

『え……』と、欣一は眼を瞠つた。

第一の斧に忽ち眞額を打割られた人の如く、彼は一度に息の根が塞がつた樣な氣がした。

『お前も最う十八になる、一通りの理窟や人情も分つて居るから、此の位の事に驚く筈はない、まあ落ち付いて聞くが可い』

和尚は靜かに云つて、さて次の如く語り出した。

其れは今から十八年前、或る冬の夜である。寒い凩が四邊の樹立に吹き荒んで、夕方から曇つた空はチラ〳〵と細かい雪を落した。良道和尚は其の日もやはり日暮前から檀家に參詣して、法事を濟ましたのは九時頃であつたらうか。寒さ凌ぎにと齋の膳に酒を附けたので、馴れぬ口に二三杯飲んだのがポッと醉を發して、和尚は好い心地に檀家を出た。主人が送らうと云ふのを斷つて、提灯の火を風に取られぬ樣法衣の袖で蔽ひながら、一人フラ〳〵

と歸つて來た。

降ると云ふ程でもない雪に、道はうつすりと白くなつて、提灯の火が茫やりと足元を照らして行く。藪陰を曲つて丁度寺の門前に來た時である、何やら呻く聲が偶と和尚の耳に入つた。犬か猫であらうと別に氣にも留めずに、其儘和尚は門の潛り戸を開けて入らうとして、忽ち愕乎として飛び退いた。其處の塀の隅の暗い蔭に、黒い動く物を見たのである。同時に今の呻き聲が其れから起るのに氣が附いた。驚きはしたものゝ良道も禪僧である以上、肝を潰して逃げ出しはしなかつた。何物であらうかと、無氣味ながら提灯を差し付けて見ると、一人の女が嬰兒を懷中に抱き緊めて突俯して居るのである。

『これ〳〵、其那處に何をして居るのだ』

和尚は乞食かと思つて叱る樣に云ひながら、能く能く眼を着けると身裝も

卑しくない。レースの肩掛に嬰兒を包んで、身には柔かな着物を襲ね、亂れた丸髷の鬢の下に白い頸筋が微かに顫へて居る樣。良道和尚は不審に思つて

『ハテナ、何處から來なすつた』

此の時女は僅かに頭を擡げた。氷の樣に青白めた顏を向けて、

『何卒御免なすつて下さい、少しの間休まして下さいまし』と、苦しさうな息遣ひで切れ〴〵に云ふ。

『お前さんは何處の人だな』

『東京から參りました』

『東京から』と和尚は首を傾けて、『して此の村へ用事でもあつて來なすつたのか』

『いゝえ、八王寺まで參るのですけれども、軀の加減が惡くつて歩かれないのでございます』と、女は又ガックリと顏を伏せて弱々しく呻く。

『病氣とはお氣の毒な。八王寺までと云つては大層な事だが、何なら寺へ入つて休みなさるが可い、雪の降るのに恁那處に居ては尚と軀に障るだらう』

『はい、有難うございます……』

『見れば赤兒を抱いて居なさる樣だな、氣の毒なことだ。さあ〳〵私は此寺の住持だから遠慮なしに入らつしやい』

『はい……』微かに答へたが、女は其儘起き上る力もない樣に蹲まつて居る

『什麼したのだ、病氣で動かれないのかな、それでは待つて居なさい、今人を寄越してあげやう』

傷ましい女の有樣を和尚は如何にも哀れに思つて、庫裡に歸ると直ぐに寺男の久七を寄越した。力の好い久七は譯もなく女を肩に掛けて伴れて來た。氣を張つて居るものゝ、女は息も消え〴〵に疲れ果てゝ、夜具の中に寝かされた儘昏々と睡つて了つた。

『あの様子ぢや到底ハァ助かるめえ、無縁佛の仲間入りだべいよ』と久七が呟く。

『可哀相に、あの赤兒を見ると未だ產後間のない女の樣だ』と和尙は云つた。

女の凍え切つた體は其の晩俄かに發熱した。夜中から激しく苦しみ出して村醫者の手當の效もなく、其の引明け方に遂に此世を去つたのである。惱みの最中に名を訊ねたので、明晰と聞き取ることが出來なかつたが、女の名はお房である、姓は名乘らなかつた。其那次第であるから、女が何の爲めに東京から八王寺へ行かうとしたのか、如何なる身分の者か、其等の事情は少しも分らずに了つた。只其の容貌の優しいのと、着て居る品の好いのとで、卑しからぬ身分の者とだけは推察される。

途中病氣とは云へ、係うして此の寺へ死にゝ來たのも何かの緣であらう、殊には親元や身寄りの筋も遂に知れないので、良道は兎も角も跡を懇に弔

つてやつた。着物や髮の物は殘らず香華の料として寺に納めた。憐れなのは取遺された子供である。生れて未だ十日と經たないらしい嬰兒を、養育院などへ預けるのは可哀相に思つて、是も和尙の計らひで、其時久七の女房が產後であるを幸ひ、乳を分けて育てゝ貰ふ事にした。六七歲になつた頃から寺の方へ引取り、自分の子の樣にして今日まで成人させた、其れが欣一である

『東京で生れて、孰れ別の名前が附いて居たのだらうが、其れも全然分らない事だから、欣一と云ふ名は俺が改めて附けたのだ』

良道和尙は係う語り終つて、其の當時の事を顯々と思ひ浮べる樣な眼をして、心深く口を塞いだ。

欣一は首を打折られた樣に俯垂た儘、何とも云はなかつた。彼れは餘りに意外な己が身上を聞いて、只胸は充溢になつて云ひ出すべき言葉がなかつたのである。眼には淚も浮ばず、兩手を凝と膝に押付けながら、全身が我なら

ずブル〳〵と顫へて居る。

霎時二人は沈默して居た。やがて、欣一は長い息をすると共に顏を上げて

『お父さん、長い間お世話になりました、其那事情を知らないものですから私は是れ迄種々な我儘を云ひました。此の御恩は決して忘れません』と顫へる聲で云つた。

『はゝゝ急に他人らしい事を云ふ。今の話は話として、是から先でもお前は仍且俺の子だよ』と和尚は微笑を浮べる。

『はい、然し私は何卒東京へ遣つて下さい』

『可いとも、行きたければ行くが可い。どうせお前を坊主にしやうと云ふ意りではないから、畫を學ぶならば充分に修業して立派な畫家になれ』

『許して下さいますか』

『然しな、東京と云ふ處は悧巧な者が集まつて居るから、生中な了簡では可

かんぞ』

『私は什麼苦學でもする決心です』と欣一は力を籠めて云ふ。

『爾か、其れなら行け』と良道和尚は頷いたが、此時偶と思ひ出して、『おゝ爾だ、俺は忘れて居たよ、お前に渡して置く物がある』

恁う云つて奥に立つて行つた。間もなく二つの紙包みを手にして元の座に歸ると、

『これはお前の母の記念だ』と、小さく包んだのを欣一の前に置いて、『中を開けて見よ』

云はれる儘に欣一は紙を開く。中から出たのは一個の指輪であつた。浮彫の波形は純金で、其れに白金の千鳥を飛ばし、中央に小豆程の眞珠が嵌めてある。恁那貴重な品を始めて見る欣一は、掌に載せて珍らしさうに眺めた

『何でも餘程値のする指輪だらう』と和尚は云つた。『今も話す通り、衣類や

髪の物は賣り拂つて祠堂に納めたが、此の指輪だけは餘り立派な品であるし後の記念にと思つて殘して置いたのだ、お前が大切に身に附て居るが可い』

『是がお母さんの嵌めて居た指輪かと思ふと、私は懷かしくてなりません』

と、欣一は飽かず〳〵見詰めた。是まで位牌を見ても別に懷かしい心は起らなかつたが、今此の指輪を見ると、顯々と生ける母の姿が眼に浮ぶ樣な心地がする。彼れは知らず知らず涙含んで居た。

『お前が是から東京へ行くとすれば、什麼緣で母の身寄の者とめぐり會ふ樣な事があつて、其時此の指輪が證にならうも知れない』

『何うかして私はお母さんを知つてる人に會ひたいと思ひます』と、欣一は憧がれる樣に眼の中を輝かした。

良道和尚は今一つの紙包みを彼れの前に出して、

『それから是はお前に遣る餞別だ、澤山にやりたいのだか貧乏寺の事だから

思ふ樣には成らん、只た三十圓だよ』

『お父さん、私は恁那物は要りません』

『要らんと云ふ事はない、譬へ苦學をする意りでも、東京へ行つて直ぐに直ぐ食べる途が得られるか何うか分らん、當座の用意に持つて行くが可い』

『濟みません、お父さんの御恩は忘れません』

欣一は兩手を疊に支いてハラ〳〵と涙を零した。和尚は思はず眼を霑ませながら、憐れむ樣に彼れを眺めた。

三

春の夜とは云へ、田舍寺の空洞とした庫裡は寂しく深けて、外には風もないのか、木の葉の囁く音すら聞えない。

多摩川の流れに臨んだ雜木の丘の上に、近頃に建てられた新しい別莊があ

る。蕭洒な日本造の建物は大きくないが、手廣く取つて庭苑には、樹木の枝振や石燈籠の布置や四阿などの數寄を凝らして、其の上四周は鐵柵を圍らしたので、多摩川一帶の眺望を迥に聚めてゐる。

花崗石の太い門柱には島崎別邸と記された。此の島崎と云ふのは東京でも可也に知られた銀行家で、牛込加賀町に本邸がある。主人は業務に忙しいので、稀に出掛けて來ては二日位づゝ滯在するが、夫人の悦子は殆ど月の半分を此方で暮らす事に定めて居る。今度も令孃の由美子と共に、折柄の春景色を樂まうとして一月程前から滯在して居る。

平生九時頃でなければ眼覺めぬ悦子が、今朝は珍らしく早起きをして、庭の四阿に出て來た。朝日は今彼方の丘の上に昇つたばかりで、晴やかな光と朝風の中に、樹々の若葉は爽々しく身顫ひをする。小鳥の聲が野にも林にも漲る樣に聞える。けれども、悦子は青白い顏をして撓さうに四阿の榻に腰を

掛けた、些つとは多摩川の流れを眺めやつたが、眩しさうに眼を反向けて了ふ。

『奧樣、此方でございますか』と、小間使のお菊が小急ぎに植木の蔭を潜つて來た。

『お部屋のお掃除が出來ましてございます。只今お茶を淹れますから何卒被入つて下さいまし、あのお牛乳は直ぐに召上りますか』

『待つてお呉れ、私は最一度寢むかも知れないから』と悦子は力なげに云ふ

『おや御氣分でも可けませんのでございますか』

『昨夜は什麼したのか少しも睡られないの』

『まア、厭なお夢でも御覽なすつたのですか』

『夢ではないの、ズット昔の事など種々考へ出してね……』

『什麼なすつたのでございませう』

『今迄其那事を深く考へたことは無いのだけれども、昨夜に限つて……』と、夫人は徼かに太息をして、『だから、夜の明けるのを待ちかねて庭に出て來たのよ、何だか寢て居るのが可怕しい樣な氣がしたの』

『まあ、不思議でございますね。私は又些とも存じませんものですから、今朝は什麼して奧樣が恁那にお早いのでせうと、今もお辰どんと爾申して居た處ですの。其那時には一寸お聲をかけて下されば、私がお體でもお擦り致しますのに』

『爾も思つたけれども、お前達は能く睡つて居るのだから……』

『いゝえ御斟酌はございませんよ。本當にもう私共は毎時でも横になるのが先か睡り付くのが先か分らない位で、朝まで夢中なのでございますもの、ほゝゝ』とお菊は大きな口に揃つた齒を見せて、氣輕らしく笑ふ。

『罪がないのだわね』と、悦子も寂しく唇を綻ばした。

『ではお褥を延べて置きませう』とお菊は其儘足を返して、急々と座敷の方へ去つた。

跡に悦子夫人は茫然と芝生の上に目を落して、何を見るでもなく何を考へるでもなく俯垂れて居る。迂濶な子雀が足元まで飛んで來て、急に喫驚した樣に舞ひ去る。夫人は鬢の毛のこぼれる顳顬のあたりをソッと指先で抑へた。

『あら、ジャックが可けないわ〳〵、叱ッ馬鹿〳〵』

座敷の庭の方で由美子の聲がしたと思ふと、不意に飼犬のヂャックが樹蔭を走り抜けて、鐵砲玉の樣に四阿の前に飛んで來た。其處に夫人の姿を見ると、忽ち尾穗を振り動かしながらぐる〳〵と其邊を廻つたが、軈てピタリと止まつて稻荷樣の樣に坐り、媚びる樣な眼をして夫人を見上げ耳を垂れてくん〳〵と鼻を鳴らした。

『またお前惡戯をしたんだらう』と悦子は云つた。

其處へ西洋人形を抱へた由美子が、漸と息を喘ませて追掛けて來た。

『あら這那處に來てるのだもの、畜生〳〵』

突如犬の傍に寄つて、長い袂でピシャ〳〵と背中を打つ。

『什麼したの、由美さん』

『だつてヂッヤクが餘まりですもの、私が一寸知らないで居た間に此の人形を咬へて振り廻してるの、隨分だわ』

『戯けるのですよ』

『だつて〳〵餘まり惡戯をするから、懲しめてやらなければ癖になつてよ』

由美子は宛も憎らしさうに又も袂を振り上げ、三つ四つ續けざまに打つた犬は一寸耳を窄めたが、平然として大きな口を開いて欠伸をして、其れから由美子を見やつた。『何ならもう少し戯けませうか』とでも云つた風。

相手が男だと中々油斷はならないが、少女の事だから袂で背中を打つた位

で懲罰が濟んだ。由美子は人形を檢めて見たが別に傷んだ處がないから、安心した樣に桃色の服に附いた砂を拂つてゐる。

『お前は何日迄も子供だわね』と夫人は笑を浮べた。

『あら厭だ、私もう子供でないわ』

『十六になれば最少し大人にならねば可けないぢやないの』

『だつて、ヂャックが餘まり憎らしいんですもの』

『其れだから子供だと云ふのですよ』と、悦子は何となしに凝と由美子の顔を見たが、偶と思ひ出して、

『ねえ由美さん』

『何ですの』

『お前が昨日堤でお話をして居た書生さんね』

『え〻』

『彼れは何處の人ですか知つて居るの』

『知つて居ますわ、此の立川のお寺の子ですつて』

『爾……』と、夫人は考へる樣な眼をしたが、『此村のお寺つて什麽お寺でせう』

『私行つた事はないの、禪宗のお寺ですつて』

『其處の本當の息子さんなの』と、本當と云ふ言葉に力を入れて訊ねる。

由美子は妙な顏をして、

『ほゝ、だつて本當に極つて居るではありませんの、嘘の子と云ふのが無いでせう』

『だけれども、世間には貰ひ子と云ふのがあるからね、彼の人は何處からか貰はれて來たのでは無いか知ら』

『あら、其那事私は知らないことよ』

『年は幾歳だらう』

『十八ですつて、十八にしては熟せてるわね』

悅子は歲を聞いて、再び何事か思ひ合はす樣な顏色をした。

『何といふ名前なの』

『欣一さんと云ふの』

『お母さんの名前は何と云ふのでせうか』

『お母樣は無いのよ、欣一さんが生れると直ぐに亡くなつたのですつて、不幸福ですわね』と由美子は思遣り深さうに云ふ。

『亡くなつた方でも名前はあるでせう、お前聞かなかつたの』

『知らないわ』

『其のお母さんは何處から來なすつたのでせうね』

『まあ、其那委しい事私知りませんことよ』

餘りに根掘り葉掘り問はれるので、由美子は困つて了つた樣に肩を搖すりながら、

『何故お母さんは其那に欣一さんの事お訊ねなさるの』と、怪訝らしく母を見上げた。

爾云はれて、悅子はハッと氣が着いた樣に口を噤んだ。我ながら餘り熱心に訊ねたのを急に後目痛く思つたのか、微に顏を赧めながら眼を反らして、

『いゝえ、何でもないけれども……』と打ち消す。

『欣一さんをお母樣の所へ呼んで來ませうか、爾すれば皆な分るわ』

『いゝえ可いの、何でもないのよ』と笑に紛らした。

其時、小間使のお菊が再び其處に現はれた。

『お孃樣、村の書生さんが訪ねて參りましたよ』

『あら爾、畫を描く方でせう』

『何ですか遠足に行く樣な裝をして、二人づれで參りましたの』

云ふ時其の二人の姿が、最早や庭の木蔭に近づいて來る。其れは欣一と猪之吉である。何樣お菊が遠足に行く樣なと云つたのも道理、二人は效々しく尻端折をして學生帽を冠り、風呂敷包みを斜に肩に結び付けた。其の中には着替などが入つてゐるのであらう。そして欣一は三四枚の畫板を新聞紙に包み、紐で括つて手に提げて居る。

『由美子さん、僕は是から東京に行くのだ』と彼れは喜悅の溢れる聲で云つた。

『俺も行くだよ』と猪之吉も莞爾した。

『おや爾、本當に決めなすつたの、偉いわね』と、由美子は二人の姿を見て含笑んだ。

『お孃さんも行かねえだか』

『私……』と、由美子は一寸母の顔を見たが、『私未だ歸らないわ』
『そんでは一緒に欣さんを助けて呉んなさらねえのか』
『いや其那事は可いよ』と欣一は打消して、『僕は苦學をする決心だから、人に補助される必要がないけれども、お孃さんに一つ頼みがあるのだ』
『什麼事……』
『今度僕は少女の畫を描いて見やうと思ふよ、だからお孃さんにモデルになつて貰ひたいのだけれども、何時東京に歸るのか知れなくては困つたな』
『モデルなんて、私羞かしいわ』と云つたが由美子は嬉しさう。
『なあに、お庭の樹の下か何かに一寸立つて居て貰へば可いのだから』
『爾、私友禪の着物を着て人形を抱いて居やうか知ら、花を持つてるのが可いでせうか』
『だつて、歸らねばハア駄目だ』と猪之吉が傍から云ふ。

由美子は急に此の二人と一緒に歸りたい心が湧き上つて、再び母を見上げた。此時、悦子夫人は三人の話には殆んど耳も傾けない樣に、欣一の顔を見詰めて居た。
『ねえお母樣、私東京に歸つては可けないこと』
『え……』と夫人は振向いたが、『お止しなさい』と首を振つた。
『什麼して』
『由美子さんが歸つては、私一人で淋しいぢやないの』
『お母樣もお歸りなさると可いわ』
『いゝえ可けません』
『爾……』と由美子は悄れた。
『其れでは恁うしやうか』と欣一は思ひ付いて、『お孃さんが歸つた頃に僕は訪ねて行くから、由美子さんの家を聞いて置かう』

『あゝ其れが可いわ、私の家はね・・』と由美子が語らうとする時、夫人は何と思つたか慌てゝ手を上げて遮つた。
『由美さん。滅多にお家なぞへ人を呼ぶものでありません。皆さん、由美子は女ですから貴方方とお交際する事は出來ませんのよ』
爾云ふ夫人の眼には悸々した不安の色が滿ちて居る。欣一は稍失望した樣に夫人を見て、何か云はうとしたけれども止めて了つた。
『詰らねえ、さあ欣さん行くべいよ』と、猪之吉は思ひ切り好く門の方へ歩き出す、
『行かう』と欣一も足を返した。
『左樣なら』と由美子は殘り惜しさうに二人を見送つて居た。前途の希望に滿たされた彼等の姿が其儘若葉の樹蔭に去つた時、悦子夫人は何となしにホッと太息を漏らした。

四

立川から七里の道距であるが、欣一も猪之吉も東京へ出るのは今が始めてである。元より汽車や電車などに乘らうとは思はない、二人は尻端折をして威勢よく八王子街道を上つた。晴々とした野面の風が麥や野菜の綠に柔かな波を立てゝ、洗ふ樣に顏に吹いて來る、默つて居ても自然に笑ひたくなる樣な好い心地である。
『由美子さんのお母さんは何故僕等に家を聞かせないのだらう、東京に行つても處が知れなくては、再び彼のお孃さんに逢ふことは出來ないだらう・・・
欣一は何となく其れを殘念の樣にも思つたけれども、然し長くは心に留めなかつた。爽かな若葉の繁る丘や村や雜木林の間を過ぎて行く中に、彼れの空想は何時しか東京の方へ走つた。此の武藏野の彼方にある日本一の大都會

——其處には望みの多い將來が自分を待ち受けて居るかと思ふと、胸の血が自づから爽快に湧き立つのを覺えた。

『猪之さん、何時頃に僕等は東京に着かれるだらうな』

『三時には大丈夫だ。着いたら直ぐと二重橋へ行つて皇城を拜むべい』と、猪之吉はむやみに面白さうに、道の馬糞などを蹴飛ばしながら笑つた。『欣さん、此の馬の糞は東京まで續いてるんだぜ。是を目印にして行けば道を間違ふ氣づかひは無え』

『はゝゝ、序に拾つて竹皮に包んで行くと土產になるよ』

『爾だ、東京の眞中へ行つたら馬の糞が珍らしかんべえ』

二人は恁那冗談を云ひ合つて笑つた。欣一は又途々、丘や小川の目新らしい景色を眺めては、好ましさうな畫題を幾つも見付けて悅んだ。而して、其の樹木の色や、雲に反射する光線の說明などをして猪之吉に聞かした。西洋

畫の講釋など猪之吉にはサッパリ分らないけれども、彼れは莞爾々々して頷いて居る。

『欣さんは偉いな、今に屹度素晴しい畫家になるぜ、俺らが受合つて置く』

などゝ感心した樣に云つた。恁那猪之吉の言葉だけでも、欣一は强い力を與へられる樣に感じて氣が勇んだ。

二人が新宿の町外れに着いたのは四時過ぎ頃である。春の日は未だ西の空に高かつた。茲邊は場末の新開町であるが、然し流石は大都會の入口らしい停車場や工場の大きな建物は彼方此方に聳え、何の音とも知れぬ市街の響が何處となく騷然として耳を打つ。

『日本一の都會に踏込んだ』と云ふ心持、只其れだけでも二人の若者の胸はドキ〳〵と波立つた。

軈て電車の通る廣い街に出て來た。

『さあ何處へ行くべえ、淺草へ行かうか二重橋を見物しやうか』と、猪之吉は小さい眼をきよろ〳〵光らしながら云ふ。
『見物に來たのぢやないからな』と欣一は躊躇つた。
『だつて、泊るにや未だ日が高えよ』
朝から歩き續けたが二人は左して疲れを覺えない。然し、何處に便つて行く當があるので無いから、欣一は何となく心が落付かなかつた。職業を求めるにしても直ぐに直ぐ勝手が知れないので、什麼したものかと迷つた。兎も角も何處かへ行つて、まづ緩くり休みながら相談を決めやうと、二人は電車に乘つて上野公園へやつて來た。
廣い大街にゾロ〳〵と蟻の樣に動く人々を見て驚きながら、其の群に交つて石段を登り、見晴しの好い高臺に出た。西郷隆盛の銅像を見上げて暫らく感心してから、端の方のベンチに腰を下ろして、眼下に涯もなく擴がつた市

街の屋根を見渡して驚嘆の聲を發つた。
『欣さん、此の見晴しで辨當を使ふべえ』と猪之吉が云ふ。
『何だか可笑しいな』と、欣一は四邊の人を見廻した。
『恁那どえらい街を見たら、俺ら急に腹が空つちやつた』
二人は竹皮に包んだ猫の頭程ある握飯を膝の上に開いた。途中で五つ食べたが未だ三つ殘つてゐる。醬油を附けて黑茶色に燒いた奴を、猪之吉は平氣で大きな口を開きモグ〳〵頰張つた。欣一は流石に憚かる樣に竹皮の蔭で食べて居る。
『はゝゝゝ、旨さうだね、私に一つ御馳走して呉れないか』
不意に傍に立つて恁う云つた者がある。欣一は喫驚して其の人を見上げた五十近い年輩の脊のひよろ高い男で、古びた鳥打帽を冠り、縒々になつた絹物を着て居るが、襟垢がぴか〳〵と日に光つて、縮緬の襦袢の袖口の切れた

所から糸がぶら下つて居る。一杯機嫌と見え、赤くテラ〳〵する顏を平手で撫でながら陶然とした眼で狎々しそうに二人を見て笑つた。
『一樹の蔭も縁の端だ、ね君、はゝゝゝ。私は酒を飲んで來たが飯を食ふのを忘れて了つた、腹が空つて見ると後悔先に立たずだな』
ふら〳〵する足を踏張つて居たが、到頭べたりと欣一の傍へ腰を掛けた。其の態度が滑稽だつたので、二人は顏を見合つて噴笑した。
『え君、どうも握飯と云ふものは異なものだ、久し振に喰べて見たくなつたんですがね、什麼だらう君』
『お上りなさい』
欣一は竹皮の儘其の男の前に出した。東京に來て始めて恁ういふ突飛な言葉を掛けられたので、彼れは怪訝な顏をして其の男の風體を眺めた。然し、高が握飯の無心なら別に恐れることはないと思つた。

『や、これは有難い』と、男は早速指に摘んで一口喰ひかきながら、『爾だつけ人に物を貰つて挨拶をしないでは濟まない』
男は思付いた樣に懷中を探つて、古い皮の紙入を取り出した。
『財布は大きいが中は皆な飲んで了つたよ』と振つて見せて、其の中から名刺を一枚取出して欣一に與へた。
『私は恁ういふ者です、必要もあるまいがまア覺えて置いて下さい』
名刺には山村直衞としてある。欣一は此の鹿爪らしい名前と體止のない當人を不思議らしく見比べた。四邊に居合せた人々は、先刻から面白い喜劇でも見付けた樣に周圍に集まつて來て三人を眺めて居たが、山村が握飯を食べ始めると、くす〳〵笑ひながら散つて了つた。
『君等は學生さんだね』と、直衞は握飯をむしや〳〵喫りながら話しかける
『今日は辨當持ちで一日遊山といふ趣向ですかい』

『いや、學生では無いけれども、僕等は東京へ勉强に來たんです』と欣一は答へた。

『ぢや田舍から來なすつたか、其れは感心だ。いや勉强でも何でも若い中に限りますよ。私の樣に年を取つちや最う跪いても駄目だからな』

『小父さん』と、猪之吉は空ッぽにした竹皮を投げ出して、口端を拭ひながら首を向けた。『お前さんは何をさつしやる人だかね』

『はゝゝゝ、私の商賣は一寸分るまい、まあ酒を飮むのが商賣の樣なものさはゝゝゝ』

『小父さんは東京の人だんべえ』

『東京だとも、是でも私の親父は德川の御家人だつたものだ』

『そんでは東京の事は委しかんべえ、俺らは訊ねてえだが、何處か俺らの樣な者を抱へて呉れる所はあるめえかね』

『奉公口を探しなさるのか』

『僕等は苦學をして勉强するんです』と欣一が云つた。

『成程、其れは感心だ』と直衞は頷いて、『可し〳〵、其れぢや握飯のお禮に私が好い奉公口を見付けて上げやう。して君等の宿は何處ですかい』

『僕等は今日東京に來たばかりです、未だ宿がありません』

『爾か、其れぢや私の宿へ來なさい、此處からつい近い所だ』

『小父さんは宿屋に居なさるだか』と猪之吉が訊ねる。

『はゝゝゝ、私は年中宿屋住居だ。飮みたい酒も飮めるし誰に小言を云はれる者がないから、氣樂で可いよ。是非一緒に來なさい、何あに宿賃が無ければ私が掛合つて上げやうから心配はありやしない』と、直衞は宛も雜作もない事の樣に引受けた。

暢氣なのか親切なのか、此の不思議な男が什麽いふ人物であるか欣一等に

は當りが附かない。然し、其の氣前の好さゝうな眼付や先刻からの振舞を見ても、人を欺く樣な陰險な人物とは思へない。何うせ今夜は何處かの宿屋へ泊らなければならないが、全きり勝手を知らぬ東京であるから、同じ事なら此の人に附いて行けば少しでも頼りがある樣に思つた。

長い春の日も暮れかゝつて、下の町並には電燈が煌めき始めた。淺草邊の高い寺院の屋根や煙突の尖などにチラ〳〵殘つて居た夕日の名殘も、何時しか消えて了ふと、黃昏の色は次第に市街の上に蔽ひかゝつて來る。公園に群て居た人影も疎らになつた。

『さあボツ〳〵行きませうか、全かり醉が醒めて了つた。今夜はお前さん達を相手に又一本勢むだらう、若い人は元氣があつて好いよ』と直衞は腰を上げた。

醉が醒めると此男の顏には急に澤氣が失せて、頰邊の皺が現はれて淋しく

見えた。立ち上つて鳥打帽を冠り直した時に、すつぺりと額の禿ぬけて居るのを見て、案外年寄りだと欣一は始めて思つた。

『什麽處だか知んねえが、附いて行つて見べえよ』と猪之吉が云つて、二人は此男と一緒に上野公園を降りた。

電車通りに沿つて、上野の停車場を廻つて直衞は淺草の方へ向つて行く。途中で繩布簾の垂つた濁酒屋の前を通りかゝると、彼れは二人を待たせて置いて一寸店先へ潜り込んだと思ふと、直ぐに一杯ひつかけて出て來た。顏馴染と見えて勘定も拂はない。其の手取り早いこと、而して一杯の酒が覿面に此の男を元氣づけるのに二人は呆れた。

直衞は鼻唄を謠ひながら、軈て灯の少い狹い橫丁へ曲つて、『安泊り』と書いた掛行燈の出て居る店口を入つた。帳場に頭を角刈にした、浪花節の前座のやうな男が坐つて居たが、

『やあ旦那お歸りですか、什麼です景氣は』とお世辭笑ひをする。
『景氣が好けりやおめ〳〵木賃宿へ歸りやしないよ』
『御冗談でせう』
『御本當だ。所で今日はお客樣を連れて來た』
『へえ又お客樣ですかい、お酒だけは御免を蒙りたいもんですね』
『吝な事を云つちや可けない、早速一本附けて貰はう』
『へゝゝ、どうも旦那に掛つちや叶はない』と番頭は頭を播いた。
『さあ此方へ上りなさい』と、直衞は欣一等に聲をかけて先に立つた。『是が木賃宿と云うて、東京で一番下等な宿屋だよ、汚いけれども安くつて氣樂で可い、はゝはゝ』
二人は直衞に連れられて、狹い廊下の突き當りの三疊の間に入つた。古ぼけた垢臭い疊の上に汚れた布團を敷いて、隣の間と共同の小さい電燈が一つ

仕切りの柱の上にぼんやり點つて居る。軈て、小鯵の煮付を菜に晩飯の膳が運ばれた。南京米の樣なばら〳〵の飯だが、欣一も猪之吉も可也空腹であつたので、盛り換へ〳〵四五杯も平げた。恁那時は何を食べても若い者の口には旨い。直衞は其の傍へ夜食膳を据ゑて、爛れた樣な赤い鮪の刺身を肴にぐび〳〵と酒を始める。
『君等も一杯やらないか、酒と云ふ奴は相手がないと旨くない』と、欣一に盃を差す。
『いや、僕は酒なんか飲みません』
『ぢや君に一つ行かう、此方は飲めさうだね』
『俺らも嫌えだよ』と猪之吉は首を振つた。
『はゝゝ不器用な人達だな。勉强でも酒でも、若い内は何でもやらなければ可けない、私の樣に年を老つては幾ら踠いたつても最う駄目だ』と直衞は

公園でも云つた樣な事を又云つて笑つた、然し、其れが半ば自分の述懷らしくも聞えた。

『人間は若い內が花だよ、私も今二十年も齡が若かつたらなア』など〻禿た額を撫でながら、何時迄も獨酌の盃を放さなかつた。二本も三本も替りの銚子を膳の前にならべた。

此の男は宿でも特別に扱はれて居るらしい。部屋も小狹い三疊ながら茲だけは一人で占領して居るが、隣室の六疊などには、大勢の客が混然に泊つて各自にガヤ〳〵と騷いで居るのだ。男の笑ふ聲もすれば、女や子供のベチャクチャ話す聲も聞える。向ふの室も其の次の室も同じ通りで、中には男や女が猥褻な話などを平氣で高聲で喋つて居るのも聞えた。

『是が宿屋と云ふものだらうか』と欣一は異樣な感に打たれた。而して間もなく旅に疲れた軀を褥の中に橫たへた。此の狹苦しい三疊の隅に薄汚い煎餠

布團に包まつて、二人は望多い前途の幸運を夢みながら、東京の第一夜を明かしたのである。

朝になると直衞は何處かへ出て行く。そして夕方にぶらりと歸つて來る。例の如く酒を飮んで二人を相手に太平樂を云つて、醉つて了ふのだ。時とすると素晴しく景氣好さそうに歸つて來て、紙幣びらを切つて御馳走を取り寄せたり、合宿の定連共へ總振舞をする樣なこともあつた。

『人間と云ふ奴は一生相場を買つてる樣なものさ。早い話が今の大臣でも富豪でも、究り買つた相場がドッカリと當つたんだ、一つ違へばごろつき壯士か乞食になるやつさ。轉ぶも起きるも運一つだから吝々したつて詰らない、何でも人間は太く短くだよ、なあ太く短くだ』

恁う云つて直衞は笑つた。此の『太く短く』と云ふのが彼れの口癖だが、瘦せてひよろ高い當人を見ると、其れが何となく滑稽らしく思はれる。此の

男の商賣が何であるかと云ふことが、二人には何うしても分らなかつた。

『不思議な人だ』と欣一は思つた。

五

東京には種々樣々の職業と、多くの勞働の需用がある代りには、其れだけ又數知れぬ人が集まつて居る。五里四方の大都會には、數百萬の人間が名譽や富を覘つて戰爭をして居るのだ。突然其の中に飛び込んで來て、什麽職業にもしろ一つの口を得やうとするのは容易な事ではない。欣一が漸く或る活版工場の職工となり、猪之吉が車屋の挽子に雇はれたのは、其れから一月ばかり後であつた。

欣一の雇はれた印刷工場は神田の錦町にあつたので、通勤の便宜の爲めに間もなく駿河臺の裏通りに貸間を捜して其處に下宿をした。尤も此の貸間も

彼れが偶然に見付けたのではなくて、直衞が勸めたのである。

『あれは私に緣のある者なんだが、私から聞いて來たと云ひなさるな。私の名前なぞ出せば却つて斷られるから、仍且君が通り掛りに探した意りに話しなさい、彼の家ならば深切にして呉れるのは受合だから』

恁う直衞は欣一に聞かした。妙な言葉だと思ひながら、欣一は勸められる儘に其處へ行つて賴んだ。山村まさと云ふ女名前の家であつた。四十二三歲の丸髷に結つた一寸小意氣に見える女主人はお歌といふ十七八になる娘と二人暮して、二階を貸間にして、階下では常磐津の師匠をして居る。鹿女菊といふ藝名を書いた御神燈の提灯が、表の格子先に吊るしてあつた。

欣一は玆の二階の六疊に移つて、晝は印刷工場に通ひ、夜は熱心に勉强を始めた。文選科の職工として日給三十五錢であるが、酒も飲まず煙草も喫はず小遣と云ふもの丶要らない彼れは、其れだけの給料で間代と食料には不足

がなかつた。東京に來たばかりで、未だ友達は一人もないので、十日に一度ぐらゐ猪之吉が訪ねて來るのを唯一つの慰みにして居る。然し、二月三月經つ中には家の者とも次第に馴れて來た。女主のお政と娘のお歌は深切に世話をして呉れるので、無口な欣一も偶には階下の長火鉢の傍へ寄つて、茶話の一つもする樣になつた。溫和で飾り氣のない氣質が、男切れのない玆の家族に殊に悅ばれた。

『本當に溫和しい方だ、氣の置けない人だ』とお政もお歌も云つて居る。

晚の五時に工場から退けて來ると、

『幸田さん、嘸お腹が空きなすつたでせう』と家の者を迎へる樣にいそ〳〵して、何か知ら旨さうな菜を晚飯の膳に附けては彼れを喜ばせる。

今日も欣一は好きな茄子の揚物で晚飯を濟ました後、何となく疲れた心地で、二階の机の前に暫らく茫乎して居ると、

『幸田さん、御勉强?』とお歌が梯子段の口から聲をかける、

『いゝや』と欣一は答へた。

『あの、お茶を淹れますから階下へ被入いな』

『有難う』

『早くね、お鐵がチン〳〵云つてるんですから』

其催促のしやうが自分で可笑しかつたと見えて お歌は『ほゝゝ』と笑つた。欣一も微笑を浮かべながら立つて、階下へ降りて行くと、風通しの好い座敷の緣側の方に最う座の座布團まで直して待つて居る。梅雨が明けてから晝は急に暑くなつたけれども、夕方からは涼しい風が落ちて、戸障子をすつかり取り除した家の中が見るから心地が好い。終日蒸し暑い工場で働いて來る欣一には、恁ういふ小洒ばりとした家の中が懷しい樣に思はれた。

『さあ貴方。此方へ被居い、二階は窓が小さいから暑いでせうね』と女主の

お政は莞爾して迎へる。
『いや、可也風が入りますよ』
『爾ですか、お暑かつたら御遠慮なしに階下へ被入いな、何なら此處へ机をお据ゑなすつても宜うございますよ』
『私がお邪魔をするから被入らないんでせう』とお歌が云ふ。
『爾ぢやないんです、其那ことは無い』と欣一は眞面目に云譯をしたので、二人は笑ひ出した。
お歌の蓮葉な轉がす樣な笑ひ聲が、欣一は好きであつた。此の娘は母親似の色の白い面長で、眉は少し剛過ぎるけれども睫毛が長く口元は殊に愛らしい。スンナリとした軀に、雨に燕を染めた眞岡の浴衣を着て、紫の入つたメリンスの帶を締めて居る。行水をした跡なので、化粧をした頸筋のあたりが一層婉やかに見えた。

『一つお摘みなさいな』と、お政は鉢に盛つた鹽煎餅を侑めた。
『はあ』と、欣一は香の好い番茶を啜つて、『今夜は稽古の人が來ませんね』と壁に掛け並べてある三味線を眺めた。
『餘まり暑いから今夜はお休みにしましたの。だけれども、毎晩ペン〱彈きますから貴方嘸お煩さいでせう』
『いや、二階で聞いて居ると一寸好いものです』
『上手ならば宜うござんすけれども、お稽古の方だから隨分お喧しいでせうと思つて私心配して居りますの。勉强が出來ないから、逃げ出すんだなんて被仰り出すと困りますからね』
『はゝゝ、其那事はないです、僕は恁那に深切にして貰つてるから非常に感謝して居るんです。置いてさへ貰へば僕は何時迄でも御厄介になりたい』
『屹度ですよ幸田さん、私がお願ひして置くわ』とお歌が力を入れて云つた

『幸田さんの樣な好い方に行かれて了ふと、私淋しいんですもの』
『本當にね、女ばかりと云ふものは何彼に賴りがありませんの。一體なら恁那常磐津のお稽古なんかしたくは無いんですけれども、是も成行ですから仕方がございませんわね』と、お政は膝に置いた團扇の繪を見ながら、述懷らしく云つた。
欣一は答へ樣がなくてマジ〳〵して居たが、
『お父さんは亡くなつたのですか』と訊ねた。
『いゝえ、亡くなつたのではありませんけれども、まあ死んだのも同じでございますよ。ほゝゝ』とお政は口元だけで笑つて見せる。
『何處に居られるのです』
『何處にウロ〳〵してゐますか、どうせ相變らずお酒でも飲み歩いて、世間に恥を晒してゐますでせう。いゝえ、彼那人は却つて居て呉れない方が可い

から、私の方から無理に別れて了つたのですけれども、でも恁那不足勝な暮しをして、お歌が可哀相でなりませんの』とお政はホロリとした樣に聲を曇らした。
此時欣一は偶いと山村老人のことを心に浮べた。『酒を飲み歩いて』と云ふ女主の言葉から只何となしに聯想したのであるが、彼の人と此の女主と同じ姓であることや、其れから此處の貸間を自分に勸めた時の山村の言葉などを思ひ合すと、欣一は『若しや』と疑ひが起つた。『彼の木賃宿に居た酒飲みの爺さん、あれがこの女主さんの良人であるまいか……』と推察して、彼れは餘程其の人の事をお政に話して、訊ねて見やうかと思つた。けれども、生中云ひ出すのも無要だからと考へて、口まで出しかけたのを止めて了つた。
『此の娘は本當に不幸福なんですよ』とお政は言葉を續ける。『お父さんさへ確乎して居て呉れゝば、恁那不自由に育つたのではないんですのに、世間に

お酒飲みくらゐ無頼なものはございません』
『お母さん、もう其那お話は止しませうよ、幸田さんが御迷惑だわ』とお歌が傍から氣詰りさうに遮つた。
『いや僕にも母がないんですから、他の事の樣に思はれないです』と欣一は眞面目に云ふ。
『爾でしたつけ、貴方もお母さんが無いと被仰いましたね、仍且不幸福な方ですよ。けれども男の方は未だお氣丈夫ですけれども、女は何彼につけて親が頼りでございますから、其れに此の娘には同胞といふ者がありませんでせう、いえ、有るには妹が一人有つたんですけれども、是は生れると直ぐに餘所へ遣つて了ひましたから……』
『え、私に妹があつて……』とお歌が驚いて叫んだ。
『あつたんだよ』

『まあ、私些とも知らなかつた。だつて今日まで一度も聞かして下さらないんですもの』
何が意外と云つて、十八歳になる迄自分に妹のあるのを知らずに居るなんて、此の位意外な事があらうかと云ふ樣にお歌は出來るだけ眼を大きくして、瞬きもせずに母の顏を見詰めた。而して、其の眼の中に恨めしさうな色を浮べた。
お政は心深く頷いて、
『爾お前には隱してあつたつけね。話したつても仕方ないんだもの、お前が三歳の時に、其の子は生れると直ぐに餘所へ遣つたんですよ。其れも遣りッ切りで義絶と云ふ約束なんだから、私だつて其れ限り顏を見たことも無いけれども無事には育つて居る樣子なの。先方の家は大變にお金持だから、彼の娘だけは本當に幸福なんだよ』

『私と二つ違ひなら今年十六ね、私會ひたいわ』
『駄目なの。親兄弟の縁は切れてるのだから、今更お前が姉だの妹だのと云はれません』
『だつて〳〵、什麽して其那事をなすつたの』と、お歌は悲しい顏をして聲を顫はした。
『種々譯があつてね』とお政は云つたが、其れ以上話すのを避ける樣に其儘口を噤んで、膝の上を見詰めた。
『何處へお遣りなすつたの、家だけ聞かして頂戴』
『其れは云はない方が可いよ、聞けばお前尙と會ひたくなるから』
『だつて聞きたいわ』
『お止し、是迄通り妹が無いと諦めて居れば可いのよ』と母は首を振つて、到頭其れは語らなかつた。

『詰らないわね』と、お歌は淋しさうに淚含んで俯目になつた。
偶とした事から思ひ掛けない話が出たので、妙に座が濕つて了つたが、欣一は退屈な顏もせずに默つて二人の話を聞いて居た。事情は違ふけれども、母のない自分の身上を思ひ比べて、世間には其れ〳〵に悲しい物語があるものだと思つた。而して、自分の身の上も玆で打明けやうかと偶と考へたけれども、流石に云ひ出すのを躊躇して其儘止めて了つた。
三人は思ひ〳〵に考へに沈んで霎時默つて居た。晩の風が水の樣に縁側に流れ込んで、幾日ばかりの月だらうか今空に出たと見えて、前の狹い庭が急にぼんやりと浮き上つた樣に明るくなつた。軒に吊した釣葱の鈴が幽にチンチンと鳴つて居る。
欣一は二人を慰める爲めに、何か話題を變へやうと考へた。で、自分の前に悄然としたお歌の姿を同情する樣に眺めて居る中に、其の婉やかな顏の輪

廓が偶と彼れの興味を喚び起した。

『爾だ、僕はお歌さんに頼みたい事があるんです』と欣一は微笑を含んで、突然快活な聲を出して云つた。

『え、何ですの』とお歌は顔を上げる。

『僕は東京に來たら美人の畫を描いて見やうと思つて居たんです、お歌さんがモデルになつて呉れませんか』

『モデルつて何んな事？』

『究り實物の手本だね、お歌さんの顔を手本にして僕が畫を描くんです』

『あら厭だ、私の顔をお描きなさるの、ほゝゝ』とお歌はポッと顔を赧らめて、羞づかしさうに笑ひ出す。

『まあ、大變な美人のお手本ですのね』と、お政も含笑んだ。

此の笑ひ聲と共に二人は先刻からの話を紛らされて、急に浮き立つた顔色

になつた。欣一は愉快らしく、『なあに造作がないんですよ、僕の休みの日に一時間位づゝ僕の前に立つて居て貰へば可いの』

『だつて私羞づかしいわ、貴郎が私の顔をジロ〳〵眺めなさるんでせう』

『眺めたつて僕は眞面目に寫してるんだから、些とも羞づかしくは無いさ』

『だつて可笑しいわね、お母さん』と、お歌は何となく興味を唆られる樣な眼をして云ふ。

『少しでも動いては可けませんの』

『長い間でないから辛抱して居て貰ふんだね、その代り畫が巧く出來れば僕はお禮をします』と欣一は云つた。

『爾、何のお禮をして下さるの』

『何が宜いだらうな、僕は金が無いんだし……』

『あら、お錢なんか私要らないことよ』

『お歌さんは何が宜いんです』

『私、爾ね‥‥』とお歌は考へる顔付をしたが、

『私何にも要らないわ』

此の返事がお政と欣一を思はず笑ひ出させた。お歌は一緒になつて樂しさうに笑つた。

六

由美子をモデルにして少女の畫を描かうといふ望が外れて、少からず失望して居た欣一は、幸に好い代りを得たのを悦んだ。お歌ならば由美子と比べて決して劣らない。お歌の方は面長であるから、畫としては由美子の方が愛らしく描けるだらうが、其の代り眉や眼元などはお歌の方が鮮かな印象を與へる。其他鼻や口元のあたりは、二人が大變似て居る樣に思はれた。

欣一は家を出る時父の和尙から餞別に貰つた三十圓が、未だ半分餘り殘つて居る。其の金で早速買ひ込んで來た寫生板と繪具を、愉快さうにお政やお歌に見せた。

『僕は田舍で風景の寫生ばかりして居たから、人物畫を描くのは始めてなんです。什麽ものが出來るか僕の技倆を試さなければならん』

恁う云つて彼れは意氣込んで居た。然し、晝間は工場に出勤するし、夜では光線が鮮かに行かないので、月に二日の休日を利用するより外がない。狹い庭の八手の葉の繁つた傍へお歌を立たせて、片手を胸の邊りに擧げて紅桃色の手巾を持たせた。そして顏を稍斜に向けた形が素的に好いと云つて、欣一はホク〳〵した。

輪廓を取るだけでも二日三日も掛る。其れから陰影の濃淡や、繪具の調合や。念に念を入れるので月に二日ばかりの休日が彼れは齒痒くて堪らなかつ

た。只た一枚の繪を描き上げるのに二月も三月も掛つて了ふ、お歌の畫が辛と氣に入る位に出來上つた頃は、もう九月の半ばであつた。

欣一が工場から退ける時分は、日點し頃の街に最早や秋らしい風がソヨソヨ流れて、白地の肌には涼し過ぎる位。彼れは濁つた水溜りの中から小川に泳ぎ出した魚の樣に、ホッと息をしながら、駿河臺の下宿をさして歸つて來る。明日は十五日の休み、暫らく猪之吉に會はないから訪ねて見やうか、然し繪の方も最う手巾と帶際の色さへ塗つて了へば、其れで全部描き上るのだがと、彼れは會々の休日を如何に面白く有益に送らうかと、考へながらスタスタ小川町の通街を急いで來る。

と、不意に背後から、

『欣さん』と呼び掛ける者がある。

欣一は驚いて振向くと、空車を挽いた猪之吉が傍に寄つて來た。

『やあ、猪之さんか』

『後姿がどうも欣さんだと思つたんだ、暫らく會はなかつたね』

『僕は明日が休みだから、お前の許へ訪ねやうかと思つて、今も考へながら歩いて居たんだよ、妙なもんだね』

二人は懷しさうに顏を眺め合つた。半年の間に猪之吉は全かり江戶ッ子らしくなつて、腕の撥ちける樣な白の半被に猿股、護謨裏の紺足袋を穿いた姿がキビ〳〵と威勢が好い。言葉までが勇肌になつた。

『俺らも訪ねてえと思ひ〳〵、此頃は馬鹿に忙しいもんだからね』と猪之吉は莞爾しながら、『爾だ、恁那處で立話も氣が利かねえや、欣さん、久し振だから其處邊で一緒に晩飯をやらうよ』

『僕の家へ行かう、冗なお錢を費ふのは詰らないから』

『まあ可いつてことよ、久し振だから附合つて呉んなせえよ、俺ら今日は素

的に景氣が好いんだからね。爾だ。彼處の牛肉屋が可からう』

猪之吉は先に立つて四五軒先の牛肉屋へ入つて行く。表に車を置いて足袋を脱いで、腕や脚をバタ〳〵手拭で拂ひながら、欣一と共に二階に上つた。牛肉の外に刺身などを註文して、酒を飲まない二人は牛鍋を突付きながら語り合つた。

『お前さんはお寺で樂をして居たんだから、俺ら心配してるんだが、工場の方は辛くはねえかね』と猪之吉が訊ねる。

『文撰科だから骨は折れない、其れに此頃は仕事に馴れたから、家へ歸つても少し位勉强が出來るよ』

『其れなら可いけども、俺らと違つてお前さんは立派な目的があるんだからね、早く俺らが金を儲けてお前さんに上げてえと思ふんだが、中々思ふ樣に行かねえ、何時まで挽子ぢや仕樣がねえから早く一本立ちになりてえよ、欣

さん、最う暫らく我慢して吳んねえ』

力を入れて云ふ猪之吉の言葉が欣一は嬉しかつた。二人が一緒に立川から出て來て、今でも眞味に友達と思ふのは此の男より外にない、然うして久し振に會つて、慰める方も慰められる方も只愉快な心地である。

『僕は此頃女の畫を描いたよ、非常に苦心して漸く出來上つたから、飯を濟ましてから見に來て吳れないか』と欣一は云つた。

『爾か、是非見せて吳んなせえ。女の畫と云へば別莊のお嬢さんは最う東京に歸つてるだらうか、一度會ひてえもんだね』

『家が知れないんだから駄目さ』

爾は云つたが、欣一は今でも由美子の事を忘れなかつた。立川で其れ程親しくした譯でもないが、彼の無邪氣な愛らしい顏や、話をする時の快活な身振などを時々懷しく思ひ出した。

『だが面白いお嬢さんだつけ。金持だと云ふから、東京に來たら自働車か何かで歩いてるかも知れない』
『俺ら腕車を挽いて東京中を歩くんだから、島崎と云ふお邸に氣を付けて見やう』
『然し、會つたつて仕方がないからな』
『はゝゝ、車夫と金持のお嬢さんぢや話も出來ねえか』と、猪之吉は肉をむしや〳〵喫りながら笑つた。
其時、向ふの餉臺でも笑ふ聲が聞えたので、欣一は偶と其方を向いた。而して、對向ひで酒を飲んでる二人の客を見ると、ハッとした樣に眼を瞠つた
『猪之さん、一寸……』
『え……』と猪之吉も其方を見たが、『やあ、木賃宿の爺さんぢやないか』
『山村さんだよ』

如何にも向ふの端の餉臺に控へてるのは直衞であつた。相手は誰か知らぬが、髮をぴつたり額に分け恐ろしく顋の角張つた若い男で、何か頻りに語りながら酒を飲んで居る。欣一は傍へ行つて聲を掛けやうかと思つたけれども若し話の邪魔をしてはと暫らく躊躇した。
直衞の方では無論氣が着かない。もう先刻から大分醉つて居ると見え、グラ〳〵する體を餉臺に支へて呂律の怪しい口で一言云つては飲み、飲んでは相手の言葉に頷くのだ。
『ねえ、是非お前さんが承知して貰ひたいんで』と、若い男は厭にニヤ〳〵笑ひながら云ふ。
『可いとも、可いとも』
『安請合ぢや困るよ、私の方は眞劍だからね』
『はゝゝ、心配なさるな、親の私が諾と云つた限りには、お歌は最うお前さ

んの嫁になつた様なものだ。なあ圭次郎さん、爾ぢやないか』と爺はふらふらする手で盃を叩と空けて、
『まあ一杯……一杯行かう』
『いや、私は可いから小父さん充分飲みなさい』と、男は其手を抑へて酌をしてやる。
『充分飲めと來たね、有難いな、御馳走になる酒は又格別旨いよ』
『然し飲むのは可いが　醉拂つて了つて肝腎の話を忘れちや可けない』
『大丈夫、むゝん大丈夫、酒は飲んでも飲まいでもだ、はゝゝ』
『其れぢや何時返事をして貰へるだらうか』と、男は體止のない爺を不安らしく見ながら　ふ。
『待ちなさい其那に物事は急いちや可けない、兎も角も女房さんに相談をして見なければな、はゝゝ、其れに何さ、實を云ふと私は女房さんから勘當

を受けてる身上だからな』
『冗談云つちや可けない、今お前さん大丈夫だと受合つたぢやないか。是だからサッパリ當になりやしない』と男は苦笑ひをする。
『なあに、勘當されたからつて元はと云へば酒だからな、詫まりさへすりや女房さんだつて惡い顏はしないよ、其れに娘の縁談を土産に持つて行けば私だつて肩身が廣いさ。お前さんの家とは其れ、妹娘の事で深い因縁もあるし又とない良縁と云ふものだ、お歌だつてお前さん許なら否やのあらう筈はないよ』
『何しろ確かり願ひますよ、其の代り今も云つた支度金のことは間違ひないんだから、約束の決まり次第小父さんの手に渡すとしやう』
『可いとも、話は分り切つてらアね、はゝゝ、何でも人間は太く短くだ、なあ、太く短くだよ』と直衞は譯の分らない事を云つて獨りで頷いて居る。

―折柄夕飯時で客が次第に立て込んで來たので、二人の話は只途切れ〳〵に欣一の耳に入つた。話の筋道は分らないが、お歌だの女房さんだのと云ふ言葉が聞えるので、若しやと思つて欣一は時々其方へ眼を向ける。爾云へば一方の若い男も、一二度家で見掛けたことがある樣だ。

『お歌さんのことを娘の樣に云つて居る口振から見ると、果然あの爺さんは家の女房さんの良人に違ひない』と彼れは思つた。

軈て飯を食べ終つて、歸る前に一寸挨拶だけでもしやうと思つて立ちかけた。と、何時の間に去つたのか最早や二人の姿が見えなかつた。

『おや行つて了つた』

『つい今まで居たのに』と猪之吉は四邊を見廻したが、此方で飯を食べて居る間に歸つたものらしい。

二人は顔を見合せながら、勘定を濟まして牛肉屋を出た。而して、駿河臺

の下宿へ一緒に連れだつて來る途々も、若し山村に會はないかと眼を配つたが、遂に見掛けなかつた。狹い横丁を入つて露地の口にある二階家が欣一の下宿である。稽古の者が來て居ると見えて、師匠の三味線に乘せて、男の太い聲で拙い常磐津を頻に語つてるのが聞える。

『その初戀は去年の秋、大内山の月の宴、其の折からに垣間見て、思ひに堪えかね一筆と、書き初めしより明暮れに……』

『欣さんの處へ來ると馬鹿に景氣が好いや』と猪之吉は笑ひながら表に腕車を置いた。

欣一が格子を開けると、お歌が駈け出して來た。

『大變に遲くなつたのね。おや猪之吉さんも御一緒に、まあ珍らしいこと』

『お歌さん、僕は晩飯を濟まして來たよ』

『あら、私支度をして什麼に待つて居たか知れませんの』

『濟まなかつたね、猪之さんに御馳走になつたんです』
恁う云つて、欣一は猪之吉と共に二階へ上つた。疊だけは新しいが、押入の紙門や壁紙が所々破れた六疊の間に、机と本箱と手爐が一つ窓際に据ゑてある。
『此の畫だよ、猪之さん』と、欣一は直ぐに本箱の上に立てた寫生板を指さした。猪之吉は其の畫を一目見ると、驚いた樣に眼を瞠つて、
『やあ、是りや由美子さんを寫したんだね』
『馬鹿を云つてる。お歌さんをモデルにしたのだよ』
『不思議だな、あのお孃さんに酷肖ぢやねえか』
『僕も何處か似て居るとは思つたが、成程、爾云へば此の畫は由美子さんだと云つても可い位だ』
二人は不思議な眼をして、畫中の女の顏を熟々眺めた。

七

二月の始め、未だ寒は明けたばかりであるが、晴天續きの日射は全かり春が來た樣に温かく照らした。長い間裸に剝れて慄へてゐた冬枯れの枝にも、黑ずんだ常磐木の葉にも柔かな明るい日光が煌めくと、鉢前の梅の梢が眞先きに二三輪の莟を綻ばして微笑んで居る。市ヶ谷加賀町の士官學校の裏にあたる所に、手廣く板塀を圍らした一構へ、これが銀行家として知られた島崎鐐三の住宅である。

二階建の奥まつた一室から朗かなピアノの音か聞える。玉を轉がす樣な輕快な唱歌の聲につれて、婉曲な音律の波は一しきり麗かな庭園の木の間に漂うてゐたが、霎時して其の樂器の音がヒタリと歇んだと思ふと、縁側の障子が明いて、晴々しい顏をした娘の姿が現はれた。

其れは令孃の由美子である。奇麗な表紙のついた雜誌を持つて、未だ口のうちで優しい聲に唱歌をしながら、パッチリと眼を瞠つて庭を眺めた。と、其の姿を待受けて居た樣に、飼犬のジャックが植込の間から鐵砲玉の樣に飛び出して來た。そして突然緣先へ前足を上げて、尻尾のちぎれる程振り動かし、首を踣る樣につん伸ばしてクン〱鼻を鳴らしながら、彼女の裾へ頭を擦り付けやうとする。

由美子は吃驚して後へ退つて、

『まあ什麼だらう、緣側を土だらけにして。馬鹿、叱ッ叱ッ』

手に持つた雜誌で叩く樣に追ひ立てた。犬は耳を窄めて緣から足を下ろしたが、尙も媚びる樣に鼻を鳴らし滑稽な身振をして見せる。

『煩さいね、彼方へ行かないかよ馬鹿〱』と由美子は眉をひそめて叱つた。

それでも未だジャックは尾を振つて居たが、軈て二三歩退つて稻荷樣の樣に坐つた。去年あたり迄友達の樣に可愛がつて呉れたお孃樣が、此頃は冷淡になつて一向自分を相手に戯けない。これは什麼した譯だらうと不審な顏付をして、人間の樣な眼で彼女を見上げて居る。

實際由美子は一つ年を取つた故か急に大人になつた。只無邪氣で仇氣なかつた彼女が、此頃は何處となく淑やかに、そして姿なども娘らしく嫋やかになつた。音樂や雜誌を讀むことに耽つて、快活な樂しさうな氣分は以前と變らないが、もう人形や犬などの友達ではなかつた。

『誰かヂャックを其方へ呼んで下さい、戯けて仕樣がないんですから』と、由美子は煩さうな疳高な聲を出した。

『ヂャック〱ヂャック』と玄關の方で書生の呼ぶ聲がしたので、犬は其れを切掛けに此方に見切をつけて、直ぐに威勢よく駈け去つた。

『ほゝゝ』と由美子は笑を含んで、草履を穿いて庭に下りた。雜誌の口繪を開きながら、清鮮な芝生の上を歩いて緩やかに植木の間を潜つて行く。石の配置などに數奇を見せた築山の上に四阿がある。其處の凳には父の鐐三がゆつたりと腰を掛けて、庭を眺めながら暢かに葉卷を燻らして居る。夫人の悅子も傍に在つた。

『おや、お父樣もお母樣も此處に被居るのね』

『うむ、今日は日曜だからお父さんも緩くりした心持だよ』と鐐三は微笑を含んだ顏を向けて、『由美子、お前は大變に音樂が旨くなつたね、此處で聞いて居ると、何處かの園遊會に行つてる樣な氣がした』

『ほゝゝ、まあ』と由美子は笑つた。

『本當に此の娘はピアノは達者でございますよ、今に洋行して音樂家になるなぞと申して居ますの』と夫人が傍から云ふ。

『はゝゝゝゝ大變な意氣込だな、望みなら洋行でも何でもさして遣るから、其の意りで熱心にやるが可い』

『お父樣、本當に遣つて下さいますの』

『可いとも、然しお前一人で行かれさうもないな』

『行きますわ、私行くなら佛蘭西が可いわね』

『はゝゝゝ、巴里でも倫敦でも行くさ』と、鐐三は快よげに香の高い莨の烟を吐いて、『處で、佛蘭西は佛蘭西として、今日は恁那に好い日和だから是から何處かへ出掛けて見やうか、え由美子、お前芝居に行きたくないか』

『私芝居なんか見たくありませんの』

『爾か、ぢや自働車で大森にでも行つて一日遊んで來やうか』

『其れよりも、私お家に居てピアノを彈いたり、雜誌を讀んだりする方が樂しみですわ』

『おや〳〵これは豪い、由美子は此節全かり大人になつて了つたね』
『其れは貴方、もう此の娘も十七でございますもの、何時まで子供で居ては困りますよ』と悦子夫人が云ふ。
『成程十七になつたのだね、爾か、十七と云へばもう好い娘だからな』と、鐐三は今更のやうに背丈のスラリと伸びた娘の姿を眺めた。
　鐐三は四十七歳であるが、顔の色澤が好く體の肉付も緊かりして少しも老人じみた處がない。廣い額の兩角が稍禿げ込んで、濃い髪を右の方に梳き分け、頬は豐に張つて、大きな高い鼻の下に黒い髭が壯年者の樣に短く刈つてある。濶達な氣性で、唇には始終愉快さうな微笑を含んで居る。けれども彼れは娘の由美子の成長を今更の樣に驚くと共に、其れだけ自分が年老つたのを倩々感じさせられた。
　そして、若々しい娘の顔を凝つと眺めながら、彼れは何事か心に思ひ浮べ

る樣に霎時默つて居る。餘り見られるので、由美子は極りが惡くなつて、
『あら、私の顔ばかり御覽なすつて、厭なお父樣』と顔を赧くしてピッタリと袂で隱した。
『ねえ悦子、考へて見ると早いもんだね、此の由美子がもう十七になるのだ』と、鐐三は夫人の方に向いて宛も感慨深さうに繰り返した。
『ほゝゝゝ、何を被仰るんですの』と悦子は怪訝な顔をする。
『いや、俺は今偶と考へ出したのだ。由美子が恁那に成長したのに付けてもあのお房の子が無事で居たら、今頃は什麽にか大きく成つてるだらうとね』
『まあ其那昔の事を……』
　悦子夫人はチラと良人を見上げたが、微かに眉に曇りを帶びて其儘眼を反向けた。
『爾だ、あれは最う昔の事になつて了つた。未だ由美子が生れない前だつた

からな』と、鐐三は其の當時の事を顯然と思ひ回す樣に、心深い顏をして、

『丁度俺が最初に亞米利加へ銀行業の視察に行つた時だから、もう十八年も前の事だ。其の留守にお房は子供を生んで、間もなく姿を隱したと云ふのだから、其の子供が育つて居れば今年十九になつて居るよ』

『貴方はお房さんや子供の事を、今でも其那にお忘れにならないのでございますか』

『いや滅多に思ひ出す事もないが、今日は什麼いふものか偶いと心に浮んだのだ。考へて見れば可哀相な事をしたと思ふ。お房は彼云ふ氣の弱い女だつたから、何か思ひ詰めて一途に家を脱出したに違ひない。什麼事情があつたのか知らないが、產後の體で生れたばかりの子供まで伴れて行くと云ふのはよく〳〵の事なんだらう。然し俺は亞米利加から歸つて、彼の事を聞いた時には全く失望したつけ』

『其れでは、お房さんの居なくなつたのを私の罪だと被仰るのでございますか』と悦子の顏色は青くなつた。そして、神經的な不安の色が眼の中に浮んだ。

『詰らない、其那事を思ふものか、お前氣に障へては可けない、俺は只思ひ出したから昔の話をする迄なんだ』と鐐三は輕く云つた。

『何卒もう其お話はお止めなすつて下さい、由美子も聞いて何んと思ひますか……』

爾云はれて鐐三は一寸娘の方を見やつた。由美子は此方の話を聞くでもなく聞かないでもない樣に、四阿の外の葉のない櫻の幹に靠れながら、靜かに雜誌を開いて居る。

『然し』と鐐三は大きな鼻を撫でゝ、『由美子が聞いて居た所で差支へはあるまい、死んだのも同樣の子供の事を話してるので、何でもない事だ。俺も彼

の當時は失望したけれども、其れから二年目に再度亞米利加へ行つた留守に由美子が生れたのだつけね、歸つて見ると赤坊が出來て居る、いや彼の時は實に驚いたよ、出發の時にはお前に妊娠の氣振もなかつたのだからね、意外でもあれば悅ばしくもあつた。其れで全かり前の失望も忘れて了つたが、不思議と云へば不思議さ、二人の子供が二人とも俺が洋行の間に生れると云ふのは妙なものだね、はゝゝゝ』と笑つた。

然し悅子夫人は、何故か此の言葉にギクリと胸を刺された樣に顏色を動かした。そして、良人の顏に少しでも疑ひの色が現はれはしないかと、怖れる樣な眼で凝と見上げた。然し、其れらしい氣色も見えないので、彼女は窃かに安心した樣に太息を漏した。

夫人の變つた樣子が鐐三の眼にも着いたが、淡泊な彼れは別段氣にも留めない風で、

『處でね悅子、俺は今更あの子供の事を兎や角う思つて居る譯ではないが、若しも彼れが何處かで無事に育つて居て、緣があつて其の居所が分つたとする。爾したら、其れを邸へ引取る事をお前は承知して呉れるか』

『はい、其れはもう……』と、悅子は言葉を掠らして俯目になる。

『いや心持を惡くしては可けない、無論其んな事はあらう筈がない、生れたばかりで名前も附けない内に別れて了つて、十八年も消息の知れない者が、今になつて逢はれやう譯はない。が是は座興の話だ、若し假に爾いふ機會があつたとしたらお前の心は什麼だらう』

『はい、其れはもう……』

『快よく引取つて呉れるか』

『貴方のお心次第でございます、私は何にも申しません』と悅子の聲は顫へた。

鐐三は續いて何か云はうとしたけれども。偶と夫人の顏に顯然と苦痛の色を見たので急に口を噤んだ。そして、吸さしの葉卷を芝生の上に捨てゝ暫らく沈默した。

『お父樣』

此時、由美子が不意に彼れの傍に立つて呼んだ。

『お父樣、私にお兄樣がありますの』

『うむ』と鐐三は頷いたが『いや、お前が今聞いてゐた通りだ、有ると云へば有る。無いと云へば無い樣なものだよ』

『本當に有つたのでせう、何處に被居るか知らないけれども、私お兄樣があれば嬉しいわ』

『何あに皆な昔の話さ、矢張り無いと思つて居れば可いんだ。無事で居た處でお前の本當の兄ではないのだから』と打消した。

『だつて、私より先に生れた方なら矢張りお兄樣よ、私什麼かして早く逢ひたいわねえ』と、由美子はパッチリした眼の中を霑まして、憧がれる樣に云ふ。

『お前は其那事を考へては可けない、もう止めだ〳〵』と鐐三は無造作に手を振つて、『今日は飛んだ事を云出して了つた、はゝゝゝ。この話は此場きりだ、何も彼も是迄通り忘れて了ふに限るよ、はゝゝゝ』

彼れは快活に笑ひに紛らした。そして突と凳を放れて、輕く兩手を腰のあたりに當てながら四阿の外を歩いて居たが、偶と思ひ付いた樣に、

『おゝ爾だ、是から杉田の許へ一寸訪ねやう、明後日の懇話會の準備を打合せて置かなければならない』

爾云つて、鐐三は其儘スタ〳〵と植込を拔けて母屋の方に去つた。悅子夫人は陰鬱な顏を垂れて、手を胸の上に置いて何事か茫然と考へに沈んで居る

由美子も傍に立つて今の兩親の話を心の中に繰返して獨りで想像や疑問を浮べながら。軈て何か母に話しかけやうとして顏を向けた時、悦子はホッと溜息をして立ち上つたので、由美子はつい云ひ出し催つた。

と、其處へ小間使のお菊が急々と築山の下に現はれて、

『奥樣、灰谷さんの息子さんが被入いましてございますよ』

『爾、圭次郎さんが何か用なの』と夫人は撓さうに訊ねる。

『はい、何ですか奥樣に内々お目に掛りたいからと被仰つてゞございます』

『爾……』と悦子は眉をひそめて、煩はしい顏色をしたが、

『其れでは此方へ被來るやうに云つてお呉れ』

『畏りましてございます』と小間使は足を返す。

『菊やお待ち、私も其方に行くわ』と、由美子は小走りにお菊の跡を追つて一緒に植込の中に消えて行つた。

八

跡に悦子夫人は再び凳に腰を下ろしたが、客を待つ爲めに衣紋を搔繕はうともせずに、先刻からの悒鬱な顏をして眺めるともなく芝生の上を見詰めて居た。正午近い麗らかな日光が、葉のない灌木の細い枝や捨石の面に柔かに光つて、溫ま湯の樣な風が植木の影を徐かに動かして居る。小鳥がチ、、と鳴いては、輕い翼を光らして飛んで行つた。

『奥さん』と聲をかけられて、氣が着いて振向くと、圭次郎はもう其處に立つて居る。

『おや……』と悦子は寂しく笑顏を作つた。

『はゝゝゝ、何か大層考へ込んで被居いますね』と、圭次郎は狎々しく寄つて來て、『今日は日曜だし、格別また上天氣ですから、皆樣が何處かへお出掛けぢやないかと心配して來ましたよ。然し旨くお目に掛られて仕合せでし

た』
『いゝえ何處へも行きません。何かあの、私に御用がありましたの』
『はあ、一寸その…』と彼れは脣に媚る樣な笑ひを浮べて、夫人と對ひ合つて腰を据ゑた。

此の圭次郎と云ふのは、以前島崎家の執事をして居た灰谷兵藏の倅である。年は二十七八にならう、頸の太い色の淺黒い男で、狹い額の上に髮を馬の鬣の樣に角刈にして、ぎよろりとした眼と、厚い脣の黒味を帶んだのが卑しく見える。そして恐ろしく角張つた顋を何時でも奇麗に剃つて居る。

『實はね奧さん』と、彼れは袂から敷島を一本出して吸ひ付けながら、『今日は少し妙なお願ひがあつて參つたんですよ、何うせ奧さんには御面倒な事なんですが、是非心配して頂きたいと思ひましてね』
『何ですの』と夫人は簡單に訊ねる。

『話は早い方が可いから御遠慮なしに申しますが、究り金なんです、お金を少しばかり拜借いたしたいんで』
『お金……』
『はあ、如何でせう、御都合して頂けますまいか』

悅子夫人は蔑む樣に男の顏を見たが、

『爾ね』と眼を反向けて、『貸して上げない事もないけれども、幾何ばかり入用なの』
『何あに澤山ぢやありません、五百圓ばかり欲しいんです』と圭次郎は態と平氣な顏で云つて、ポッカリと煙草の煙を吐き出した。
『まあ、其那に澤山……』
『はゝゝゝ、奧さんが驚きなさる程の金ぢやありませんよ。尤も私共にや大金です、五百圓と云ふ金は一寸工面が附きかねるもんですかゝ、據所なく此

方へ内々でお願ひに來た樣な譯なんです。實は奥さんに喜んで頂きたいので私は今度女房を貰ふことになりました』

『爾ですか、其れはお芽出度いことね』

『奥さんも御存知でせう、先方はそれ、此方の遠い御親戚に當るとか云ふ山村直衞さんの娘なんですよ』

『え、山村の……』と悅子はハッと顏色を動かして、思はず叫ぶ樣に云つた

『意外な事でせう』と、圭次郎は夫人の驚きを待受けて居た樣に皮肉らしく笑つて、『お歌と云ふ娘さんです。彼の家も以前は相當にやつて居たのに、何しろ山村さんの酒と相場で全かり潰して了つて、今では夫婦別れをして、女房さんが其の歌と云ふ娘と二人、駿河臺に常磐津の師匠をして暮して居ますのさ。其れで私もちよい〳〵氣紛れに稽古に行つたりしてる中に、其の娘を私が貰はうと云ふ話になつたんです。緣と云ふものは不思議なもので、彼女

は確か此方のお孃さんの姉娘でしたね……』

『まあ圭次郎さん』と悅子夫人は慌てゝ手を振つて遮つた。そして、悸々した眼で四邊を見廻したが、脣の色まで青くなつてコクリと息を吞みながら

『貴方は何を‥何を云ひなさるの』と慄へる聲で咎めた。

『おつと、是は秘密でしたつけ』と圭次郎は恍けた樣に、口へ手を當る眞似をしながら、『御免なさい、話の序だから迂つかり口を辷らして了つた。いや其那事は什麽でも可いんです、究りお歌といふ娘を私が貰ふに就て、山村では到底も嫁入仕度に手が屆かないから、五百圓だけ仕度金として出して貰ひたいと恁う云ふんですね。何しろ先方では差當り餘所へ出したくない娘を、謂はゞ此方から無理に貰はうといふ樣な譯ですから、道理な條件なんです、其の位の事は無論宜しいと約束したんですが、偖て金の出途がありません、種々惑ついた揚句に到頭奥さんに御面倒を願ふより外がなくなりました。其

れで今日伺つた譯なんで、何うか奥さん、是非心配をして頂きたいんです』

悦子は凝と顏を垂れて何とも答へない。不安な混亂した曇りが眉のあたりを深く閉ざして、膝に置いた手は微かに顫へて居る。

先刻良人の鐐三が妾のお房の子供の事を云ひ出した時にも、悦子は只ならぬ恐怖の色を顏に顯はしたのでも察しられるが、其の子供の事と、今又圭次郎の口から漏れた由美子の身については、實は恐ろしい秘密の罪が蔽はれてある。其れは十八年前に鐐三が渡米した留守中、悦子の旨を受けて、執事の灰谷兵藏の惡辣な手で萬事が首尾よく行はれた。而して今日まで良人には全く知れずに過ぎた。此の秘密を知つて居る者は悦子自身と灰谷の外には無い筈であるが、何時の間にか圭次郎には父の口から語られて居た。彼れは其れを知つたのを好い種にして、夫人の弱味に乘じては、是迄にも何の彼のと因縁をつけて小使錢の無心に來た事は三度や四度ではない。其の都度夫人は忌

忌しく思ひながら、少し位の金は默つて出してやつた。其れに味を占めて、圭次郎は今日も恁んな難題を平氣で持込んで來たのだ、爾思ふと悦子は自分の秘密の罪が今更の樣に悲しく淺ましく、そして何處までも附込まうとする此の男の厚顏ましさが、面憎くも腹立たしくも思はれた。

然し、夫人が何と思はうと圭次郎は平氣なものだ。貰ふ物さへ貰へばと云はぬばかりの落付き拂つた面構へをして、角張つた顋を撫で廻しながらジロリ〱と夫人を見て居る。けれども何時までも答へがないので、彼れは悟かしくなつて、

『えゝ奥さん、如何でせうか』と促した。

『……………』

『默つて被居つては困りましたね、私も此方ならば大丈夫と云ふ心算でお願ひに來たんですから、ねえ奥さん、何うか今度だけ助けて下さいませんか』

悦子は丸髷の鬢のほつれが顳顬のあたりにかゝるのを、煩さゝうに細い指で掻き上げながら顔を擡げた。

『ですけれども、貴方も隨分無理を云ひなさるのねえ』と、冷やかな眼で彼れを見詰める。

『え、無理と被仰るんですか』

『些とは貴方も考へて見なさるが可うござんす、又しては何の彼のと無心に來て、是迄に上げたお金も少しではありませんよ。其れを好い事にして又五百圓なんて、其んな大變なお金が私の手で出來るとお思ひなさるの』

『いや誠に濟みません、爾被仰られると一言もありませんや』と圭次郎はニヤリと笑つて見せて、『然し他の事と違つて、今度は一生に一度の結婚の費用なんですからね。何あに親父さへ生きてれば什麽にかなるんですが、去年ポックリ逝かれてから全かり廻らなくなつて了つたんで、御無理な處を是非一

つ御都合して頂きたいんです』

『でも私に其那お金が出來ないではありませんか』

『はゝゝゝ、御冗談被仰つちや可けません、島崎さんの奥さんに只た五百圓の金が出來ないと云つたら、世間の人が噴笑して了ひますあ、はゝゝゝ』と彼れは態と大きな口を開いて笑つた。

『其れは島崎の財産から見れば爾かも知れないけれども、私の自由になるのではありません』

『然し高が五百圓です、都合して下さる御心算さへありや什麽にだつてお出來なさる筈ですよ』

『圭次郎さん、其んな無理を云はないで、今日は何卒歸つて下さい』と、悦子は耐へかねて焦々する樣に眉を顰めた。

『ぢや、什麽しても可けないと被仰るんですね』

『貴方も餘まり執拗いではありませんか』と、悦子は脣を噛んで顔を反向けて了つた。

此の冷淡の言葉を聞くと、圭次郎も流石にむつとした樣に氣色ばんだ。

『爾ですか、是れ程事情を分けてお願ひするのに、頭から取合つて下さらなけりや仕方がありません、いや宜しい』と自棄に頷いて、『然し私は什麼しても此の金を造らなけりや、惚れた女を女房にする事が出來ないんですからね私は一生懸命でさ、奧さんに撥付けられて他に工面の途がありや可いが、據所ない場合には什麼手段を考へるかも知れません。奧さんに取返しの附かない御迷惑を掛けるかも知れないが、恁うなりや仕方がありません、前以てお斷り申して置きます。いや執拗く強請り付いて失禮しました』

吐き出す樣に云ひ捨てゝ、彼れは出來るだけ厭味たつぷりな眼で夫人を尻目にかけながら立ち上つた。先刻から煙草を吸つては喋り、喋つては吸つた

のでロが苦辛つぽくなつて、ぺつと唾を吐いた。そして其儘ノサ〳〵と立ち去らうとする。

『圭次郎さん、お待ちなさい』

悦子は顫へる脣から恁う呼び止めずには居られなかつた。胸の中には憎らしさと口惜しさが込み上げたけれども。

『何ですか』と彼れは立ち止まつた。

『お待ちなさい、貴方は私に其んな厭味を云つて、お金を什麼して拵へる心算ですの』

彼れは待設けた樣に冷笑を浮べながら、

『什麼するか、其れを貴方に御相談をする必要がありません、然し他に工面の途はないんですから、何れ旦那にでもお目に掛つて、お願ひするより外が無いでせうよ』

『貴方は此上私を苦しめやうとするのですか』
『いや、人を苦しめるよりも私が苦し紛れです、恁うなれば人情だの秘密だのと云つて居られませんからね』と、秘密と云ふ言葉に力を入れて陰険に笑つた。
悦子は再び脣を咬んで默つた。圭次郎の言ひ草が金欲しさの脅嚇であるのは見え透いて居るが、此儘棄てゝ置けば、或は我が秘密の罪を良人の鐐三の前に持ち出して、金を強請しやうとするかも知れぬ。果して良人から金を取り得るかは疑はしいが、自分への面當てにも爾いふ殘忍な不人情をしかねない男である。十八年以來包まれた秘密の罪、其れを聞いた良人が什麽に驚くであらう――爾考へるだけでも悦子の胸は冷たくなる、恐ろしさに身中が慄へる。
『圭次郎さん、お金は……お金は私が上げます』と悦子は前後もなく、半ば

叫ぶ樣に云つて了つた。
『え、金を出して下さいますか』と圭次郎は急に微笑を漏らして、夫人の傍へ戻つて來る。
『上げますけれども、私は五百圓といふお金が手許にありませんから、四五日待つて下さい』
『四五日……いや、私は今日の中にも先方へ渡さなければならない金ですからね、お持合せがなければ小切手でも結構です、同じ事なら何うか直ぐにお書き下さいませんか』
其の圖々しさ、悦子は唾を吐きかけたい程にも憎かつたが、然し其那事を爭つても仕方はない。
『それでは爾しませう』と胸を抑へて頷いた。而して彼れを其處に待たして夫人は徐に四阿を出た。

九

悦子夫人と主次郎が庭の四阿で恁那話をして居た間に、玄關の方では珍らしい事が起つた。主次郎を乘せて來た若いキビ〳〵とした車夫は、門の前に俥を置いて毛ラッコの膝掛けを肩から引被けながら、蹴込に腰かけて待ち合せて居た。人通りの稀な此邊りの道には埃も立たず、温かい日光が長い塀にほか〳〵と一ぱいに當つて、士官學校の土堤の枯れ草が今にも緑の芽を萠きさうに見える。凝つとして居ると睡氣のさす樣な暢かな眞晝である。

此の若い車夫は猪之吉であつた。彼れは長待ちの退屈凌ぎに新聞を出して讀んで居る。と、門の中から不意に駈け出して來た犬が、何が面白いのか土堤の上を二三度クル〳〵飛び廻つて、軈て門柱の根に戻ると、大きな口を開いて欠伸をして首をブル〳〵と振り、それからゴロリと其處に横になつた。

『おや、立川に居た彼の犬ぢや無えか……』

猪之吉は犬を見て偶と爾思つた。焦茶色にむく〳〵と肥つて、頸から前足へかけて白く斑になり、大きな飛出した樣な眼の上にも丸い斑點がある。猪之吉は先刻此の邸へ俥を着けた時、島崎鐐三と記された門札を見て首を傾けたが、鐐三と云ふ名前を知らないので別に深く心にも留めなかつた。然し、今見覺えのある此犬を見ると彼れは急に思ひ當つた。

『島崎といふお邸で此の犬が居るところを見ると、彼のお孃さんの家は此處かも知れない。確かに爾だ』と猪之吉は頷いた。

犬の名を忘れたので彼れは輕く口笛を吹いて、手眞似をして呼んで見た。犬はノソ〳〵傍に來て猪之吉の足元を嗅いだが、思ひ出さないのか、氣の乘らぬ顏をして云ひ譯の樣に尾を振つて居る。

『忘れたか、此ン畜生め、無理もねえや』

猪之吉はゴシ〳〵と頸を撫でゝやつた。立川の別莊に居たのは確かに此の犬である。彼れは玄關へ行つて書生にでも訊ねて見やうかと思つた。然し、自分は途中から客を送つて來た車夫に過ぎない、其れが立川でお孃さんと口を利き合つたと云ふだけの因緣で、今更知合ひ顏をして訊ねるのも可怪しい縱んば此の邸が由美子さんの家だとしても、此の犬と同じく自分なぞを忘れて居るだらう、また覺えて居た所が、恁那立派な邸の令孃が車夫に會つては吳れないだらう、爾思ふと猪之吉は流石に氣が引けて躊躇した。

其時玄關の方で人の聲が聞えたので、偶と覗いて見ると、妍やかな身裝をした令孃の姿と、小間使の女が上り口に現はれた。

『おゝ、矢張りお孃さんだ、由美子さんだ』猪之吉は思はず胸を躍らした。

今由美子は友達を訪ねやうと思ひ付いて出掛けるのであつた。オレンジ色の絹編のショールを掛け、紫の袴を婀やかに穿いて、沓脫石に揃へた護謨

草履の上に降りながら、

『神樂坂の傍なの。いゝえ腕車なんか要らないわ、お天氣が好いから歩いて行くのよ』と優しい快活な聲で云ふ。

『でもお午後は風がお寒くなりますから』

『直きに歸つて來るから可いわ、學課を一寸お訊ねする事があるの』

『左樣でございますか、行つて被入いまし』

小間使に送り出されて、由美子は草履の足を輕く運びながら門の外に出て來る。其の姿を待受けて居た猪之吉は、急いで帽子を脫つて、

『お孃さん』と、思切つて聲をかけた。

由美子は驚いた樣に立止つて、彼れの顏を見ると、

『あら、猪之さんぢやないの』

『へい猪之吉です、爾ですよ、お孃さん能く覺えて被居いましたね』

『まあ……』と由美子は清しい眼を瞠つて莞爾した。
『私ア先刻から此の犬を見て、確かに爾ぢやねえかと思つたんです。矢張り此處がお孃さんのお邸なんですね。到頭お目に掛りましたね』と猪之吉は滿面に喜悦の色を溢らして云ふ。

由美子は欣一等の事を忘れては居なかつた。二人が什麼して居るだらうと時に觸れては思ひ出す事もあつたが、此處で猪之吉に逢はうとは思掛けなかつたので、懷しさうに傍に寄つて、
『本當に珍らしいこと、私什麼したのかと思つて居たわ。猪之さんは車夫さんに成つたのね、八百屋にはならなかつたの』
『はゝゝ、八百屋だつて資本がなけりや丁稚ですから、何方だつて同じですよ』
『猪之さんは力があるから何にだつて成れるわ、車夫さんが好く似合つてよ

私見違へて了つたわ』
『はゝゝ』と猪之吉は無暗に愉快さうに笑つて、
『私よりもお孃さんこそ、一年見ねえ中に全かり一人前のお孃さんにお成りなせえましたね』
『まあ厭だ、一人前だつて……』と由美子は仄と顔を赧らめながら、『そして欣一さんは什麼して居て？』
『欣さんは職工になりましたよ』
『職工つて何？』
『活版所の職工でさ』
『まあ其那ものになつたの、畫を描くのは止めて了つたの』
『畫を止めちや大變でさ、だけれども苦學をするんだから、氣樂に勉强ばかりしちや居られませんからね、晝間は活版所へ通つて日給を貰ひ、晩だけ一

生懸命畫を描くんです』
『爾、偉いわね、今に屹度成功するわ』と由美子は感心した樣に頷いた。
『日本一の畫家に成れるつて私ァ受合つてるんだ、畫の理窟は私ァ知らねえけれども、全く巧いもんですぜ。爾々先達て可愛らしい娘の畫を描きましたつけ』
『少女の畫を描きたいと云つて居なすつたわね、其れが出來上つたの』
『あれはお孃さんを手本にしてえと云つてたのが、外れたもんだから、欣さんは落膽して居たんです。すると好い鹽梅に欣さんが下宿してる家に娘があるんでね、それを賴んで手本にしたんです。大變に苦心をしたんだが素的なもんでさ』と猪之吉は自分の事を自慢する樣に欣一を褒めた。
『おや爾、其那娘さんがお家に居なさるの』と、由美子は何となしに輕い嫉妬を感じながら云つた。猪之吉が恁那に褒めるのだから、其の畫は本當に好

く出來たに違ひないと思ふと、自分がモデルにならなかつたのが殘念の樣な氣がする。
『處が不思議ぢやありませんか』と猪之吉は思ひ出して、『其の娘の畫がお孃さんに酷肖なんです、私ァ一寸見た時に必然お孃さんを描いたんだと思つた』
『ほゝゝ、まあ什麽してなの』
『欣さんも氣が着かなかつたんだが、爾思つて見ると家の娘がお孃さんに能く似て居るんです。他人の空似と云ふんでせう、眼や口元などは生映しですよ』と猪之吉は由美子の顏を眺め、彼の畫を思ひ合して益々不思議の樣に思つた。
『奇體だわねえ』と、由美子も怪訝な眼をして、『什麽娘さんか、其の畫を私見たいことね』
『お孃さんに見せてえ。本當に見せてえよ。今日お孃さんにお目に掛つた事

を欣さんに話して、畫を持つてお邸へ伺つても構ひませんか。欣さんも時々お孃さんの噂をしてるんだから、悦んでやつて來ますよ』

『欣さんにも逢ひたいわ』と云つたが、由美子は心の内に母の所思を憚りながら、『下宿は何處ですの、私が一度訪ねて見ませうかしら』

『駿河臺です、お孃さんが入被つちや坐り場もねえ樣な所でさ』と、猪之吉は欣一の下宿の所在と其處に行く道順や目印などを委しく話した。

『私是から行つて見やうか知ら』と、由美子は急に物珍らしい心に誘はれた。

『未だ欣さんは家に居ませんよ、晩方でなけりや工場から歸つて來ねえんですから』

『毎日爾なの、工場には日曜がないの』

『一日と十五日と二日しきや休みが無えんです』

『まあ大變ね、活版所と云つて什麼仕事をするのか知らないけれども、隨分

辛いでせうねえ』と沁々同情する樣に云ふ。

『お孃さん、本當に來て下さるんですか』

『えゝ、今晩にでも訪ねるかも知れないわ、欣さんに爾云つて置いて頂戴』

猪之吉が車夫であつても、由美子は少しも隔意なく懷しさうに樂しさうに語つた。猪之吉は小さい眼を輝かしながら、氣前の好い笑ひを絶えず溢らして居る。二人は宛ら彼の多摩川の堤に居る樣な、打解けた馴れ〳〵しい心地に滿たされた。

と、其時圭次郎が門内から出て來た。彼れは五百圓の小切手を懷中にしたので、獨りでニヤ〳〵笑ひを含んで居た。其處に二人が話して居たのを見ても、豈か此の令孃と車夫とが知合ひとは思はないから、犬の話でもして居たのだらうと怪しみもしなかつた。而して二言三言由美子に阿諛を云ひながら腕車に乘つた。

『ぢやお孃さん、又お目に掛りませう』
恁う別れを告げて猪之吉は梶棒を上げると、威勢よく佐内坂の方へさして駈出して行く。由美子は其處に立つて、腕車の跡を暫く見送つて居たが、急に友達を訪ねるのが詰らなくなつて、其儘門の内へ引返して了つた。
『おや孃樣、お忘れ物でもなすつたのでございますか』と小間使のお菊が訊ねる。
『私止めたわ』
『何故でございますの』
『だつて、もう厭になつたから』
『ほゝゝゝ、まあ氣紛れなお孃樣』とお菊は呆れ顔をして笑つて居る。由美子はショールを脫つて椽側傳ひに母の居室の方に行つた。
圭次郎を返した後、悦子は自分の居室に閉籠つて、凝と深い物思ひに沈んで居た。彼那破落漢の不法な無心を斥ける事の出來ない我身を、口惜しいと思ふに就けても、彼女の心は暗く惱ましく閉ぢられた。可恐しい過去の罪や良人に秘密を抱く現在の苦しみや、悔恨や、恐怖や、寧そ凡ての罪を良人の前に自白して了はうか、爾したら此身の運命は什麽なるであらうと、樣々な思が渦巻の樣に入り亂れて、胸は犇々と痛みを覺ゆるばかり。蠟の如くに青白めた顔を垂れて、眼には涙も浮ばず、絞り出す樣な溜息が又しても戰く唇から漏れた。
『お母樣』と聲をかけて、其處に由美子の姿が現はれた。
『何ですの』と夫人は淋しい顔を上げて、今も今苦悶の種となつてゐる其娘の顔を見ると、一入悲痛の色が眼の中に浮んだ。由美子は其れとは知らぬので、
『私、晩に駿河臺へ行つても可うございますか』

『お友達でも被居るの』
『えゝ、お友達と云へばお友達の樣なものよ』と由美子は稍口惜つて、『そらお母樣も覺えて被居るでせう、立川の別莊で親しくなつた欣一さん、彼の方の所へ遊びに行きますのよ』
『えゝ、彼の人……』と悅子は欣一と聞いて悸乎とした樣に顏色を變へた。
『ねえお母樣、可いでせう』
『まあ、什麽して彼の人の居處なんぞ知つたのです』
『私、聞きましたの、欣一さんは東京に來て、駿河臺の山村さんと云ふ家に居なさるのですつて』
『え、山村さん……』悅子はグッと胸を突刺された樣に、見る〳〵眞青になつて、『いゝえ〳〵可けません、其那處へ決して行つてはなりません』
其言葉が餘りに銳く顫へたので、由美子は吃驚した樣に母の顏を見詰めた。

十

山村と聞いて母が何故彼那に吃驚して顏色を變へたのか、そして欣一に會ふことを何故彼那に聲を慄はして禁めるのか、由美子には少しも理由が分らなかつた。けれども悅子の言葉が餘りに銳かつたので、由美子は其れきり押して願ふことも出來なくて悄々と自分の居間に戾つた。何だか知らぬが急に悲しい心持が胸に充溢になつて、机の前に坐ると、知らぬ間に睫毛に綴つた淚がホロ〳〵とこぼれて來た。
『まあ、私何を泣いてるんだらう』と由美子は氣が着いて、袖口で眼を拭ひながら獨りで微に笑みを浮べた。淚をこぼす程の悲しい事が何にも無いのにと、自分ながら不思議に思つた。駿河臺へ欣一を訪ねやうと思つて勇んで居た所を、譯もなく母に叱られたのが、其れ程彼女を悲しませる筈はない。

然し、由美子は何となく欣一に會ひたくてならなかつた。彼の時立川の別莊の庭で別れたきり、欣一や猪之吉の事なぞ偶に思ひ出す事があつても、只『什麼して居るだらう』と輕く思つて見る位で、別に深くも考へたことはない。其れが今日圖らず猪之吉に逢つて二人の消息を聞いてから、妙に欣一が懷しくなつた。親近と云つても、多摩川の堤で五六度一緒になつて、景色を見ながら無邪氣に語り合つた丈であるが、由美子は何だか最つと〳〵ズツと幼い時から親しい仲の樣な氣がする。其れを一年の間消息も知らずに居たのは、自分が大變に冷淡で濟まない樣にも思つた。

『職工になつて苦學をして居なさるんだつて、什麼樣子でせう。本當に會つて見たいわねえ』と、頻に唆られる樣に駿河臺の方へ心を引付けられた。

其晚彼女は寢室に入つてからも、柔かな夜具の天鵞絨の襟に深々と頰を埋めながら、種々と欣一の事を心に浮べて見た。頭を一分刈にして、紺絣の筒

袖の臂を捲し上げて、草の中に尻を据ゑながら一心に寫生をして居る青年の姿が思ひ出される、そして、淸しい眼を輝かして熱心に畫の說明をする、彼の優しい子供の樣な口元が眼に浮んで來る。

『僕等は貧乏だから思ふ樣に畫の研究が出來やしない、金持と云ふものは幸福だなア』と彼れが嘆息した、其那事を由美子は一つ〳〵思ひ出して、沁々と同情の念に動かされた。

『彼那に畫が熱心なのだから、職工なぞをしないで美術學校に入つて勉强なさると可いわ。費用が無ければ、私お父樣に願つてお金を頂いて上げやうかしら……』

其れにしても什麼かして一度欣一に會ひたい。お母樣は何故彼那に嚴しくお制めなさるのか知らないけれども、許して下さらなければ、お母樣に內密で駿河臺へ訪ねて見やうかと彼女は考へた。夜一人で邸を出ることは出來な

いから、十五日の欣一さんの休みの日にお友達を訪ねると云つて家を出て、而して窃と駿河臺へ行つて見やう――爾思ひ付いた時、由美子は我にもなく胸を轟かした。苟にも母の眼を晦ます様な事を始めて考へた彼女には、其れが非常に恐ろしい企ての様に思はれたのである、けれども、欣一を訪ねるのが決して惡い事ではないと自分の心に云譯した。

今日は九日だから休みの日まで未だ六日あると、胸の中で日を數へたりして居る内に、由美子は次第に睡氣ざして來て、霧の樣なものに顔を包まれるやうな心地で、其儘昏々として夢に入つた……

薄暗い坂の樣な所を大急ぎで歩いて行くと思ふと、由美子は何時しか駿河臺の只ある露地に來て居る。周圍は寂と寢鎭まつた中に、晝間猪之吉に敎へられた其の二階家が前に見えて、小窓からボンヤリと灯が射して居る。

『おや、私は什麽して此處へ來たのだらう、今日は未だお休みの日ではないのに』と、彼女は不思議に思つて四邊を見廻した。

と、二階の窓がサッと開いて男の顔が現はれた。

『由美子さん、能く來ましたね』

『あゝ、欣一さん』と、由美子は胸の跳る樣な懷しさを覺えながら彼れの方を見上げた。

『大變に遲いぢやありませんか』

『えゝ、貴郎未だ御勉强なの』

『僕は每晩一時まで起きてるんです、今夜は屹度由美子さんが來るだらうと思つたつけ』と、欣一は突然由美子が訪れたのを左程驚いた風もない。そして電燈の光に片頰を照らされた顔が悅ばしげに微笑した。

『私、貴郎の描きなすつた畫を見せて頂かうと思つて來たのよ。今日猪之吉さんに聞いたものだから早く見たくてならなかつたの』と由美子は云つた。

『お待ちなさい、今表を開けるから』
爾云つて欣一の顏は窓から引込んだ。何處の家も最早ぴつたりと戸を閉ざして、淋しい町には夜霧が深く立籠めてゐる、遠くの町から夜廻りの拍子木の音が微かに聞える、恁那にもう遲いのだらうかと、由美子は今更の樣に氣味惡く四邊を眺めた。
間もなく欣一は表戸を開けて、
『さあ由美子さん』と小聲で呼んだ。
由美子は身を窄める樣にして內に入つた。薄暗い茶の間を通つて、家の人達の靜かな寢息を聞きながら、氣着かれない樣に梯子段の足音を竊んで欣一の跡につゞいた。二階の室には五燭の電燈が机の上に引張られて淋しさうに點つてゐる。
『まあ、恁那處に被居るの』と由美子は珍らしさうに室の中を見廻した。そ

して、何といふ陰氣な狹苦しい所だらうと思つたけれども、然し自分が到頭欣一の下宿へ訪ねて來たのが嬉しくて、其邊の埃臭いことなぞには氣も掛けなかつた。
『是でも僕の爲めに金殿玉樓なんだからね、一人で勉强するには是で澤山ですよ』と、欣一は快よさゝうに机の前に寛たりと坐つた。
『爾ですとも、欣一さんは屹度成功なさるから、今に什麽立派なお家にでも住まれるわ』
『然し由美子さんが能く訪ねて吳れましたね、恁那に遲く、腕車で來たんですか』
『いゝえ歩いて來たのよ』
『市ヶ谷から此處まで隨分遠いよ、一人で能く可怖くなかつたね』
『私どんな道を通つたか覺えが無いの、全で夢中で來たのだわ』

『お母さんに内密で家を出たんでせう』
『え……』と、由美子は悔乎した樣に欣一の顔を見た。
『僕は知つてるさ、由美子さんが僕の所へ來るのをお母さんは許して下さる筈がないんだもの』と欣一は微笑を含んで、『然し僕は非常に嬉しいよ、東京に來てから什麽かして一度由美子さんに會ひたいと思つて居たんだ。由美子さんも僕の事を忘れなかつたんだね』
『彼の時から直きにもう一年になるわね。だけれども、私何故だか知らないけれども、欣一さんの事は是から一生忘れない樣な氣がするわ』
二人は顔を見合つて何となしに莞爾した。和かな打解けた親し味が互の胸から胸へ流れ込む樣な心地がする。由美子は其處が駿河臺の欣一の下宿ではなくて、何時の間にか多摩川の堤の草の上に二人が並んで話して居る樣にも思はれた。すると、今にも母が其處に來て自分達を見附けはしないかと、急

に不安の念に襲はれた。耳の故か遠くの方で母の足音が聞えて、其れが次第に近づいて來る樣な氣がする。
『什麽したんです、何だか逡巡して居ますね』と欣一は云つた。
『えゝ、私早く歸らねばなりませんの、貴方がお描きなすつた少女の畫を見せて頂戴』
『爾だつけ、是ですよ』
欣一は本箱の上に立てかけた寫生板に、新聞紙の被けてあるのを取り除けると中から莞爾と笑みを含んだ愛らしい娘の顔が現はれた。
『あら』と由美子は眼を睜つて、『まあ奇麗だこと』と片手を疊に支いて感心した樣に凝と見入つた。
『なあに恁那寫生板なんだから駄目だ、今度は僕本當の畫板に描いて見やうと思ふよ』

『でも好く出來てるわ、そして本當に優しくて美しい方だわね、是が此家の娘さんですの』
『歌さんと云ふの、然し僕は不思議でならない、此の眼や口元が由美子さんに酷肖なんですからね、歌さんと由美子さんが姉妹でないかと思ふ位だよ』と、欣一は由美子の顏と畫面とを見比べて、『實際好く似てるよ』と熟々不思議さうに云ふ。
『だつて、私にお姉様なんかありやしないわ』と云ひながら、由美子は恁那優しい娘が此家にあつて、始終欣一と親しくして居るかと思ふと、我にもなく嫉ましい心が胸に湧いて來た。そして、畫を見詰めた眼が自分ながら鋭く輝くのを感じた。
『然し他人の空似と云つても、恁那に似てるのは不思議ですよ』と欣一は首を傾けて頻りに兩方を見比べて居る。

『お姉様は無いけれども……』此時由美子は偶と父の話を思ひ出して、『私にはお兄様があるんですつて。私些とも知らなかつたけれども、其のお兄様は幼い時に他所へ行つて了つて、今では何處に被居るか知れないのよ。若し無事で被居れば今年十九ですつて』
『十九？僕と同じ年ですね』
『えゝ爾よ』
『ぢや、僕が由美子さんの兄さいぢやないだらうか』と欣一は冗談の樣に笑ひながら云ふ。
『いゝえ兄さんでないことよ、貴方は私の良人ですわ』と由美子は彼れの顏を凝と見た。自分ながら能く恁那羞かしい事が云はれると思つて、顏が火の樣に赧らむのを覺えたけれども、其の言葉は獨りでに脣から溢れ出た。
『え、僕が由美子さんの……』と欣一は驚いた顏をする。

『爾よ私貴方の奥樣にして頂戴』
云ふ時、突然バタ〳〵と梯子段を上つて來る音がしたので、由美子は吃驚して振向くと、ツカ〳〵と傍に立つたのは家の娘のお歌である。畫に寫された通りの美しい顏が青白め、腹立たしげに由美子を見据ゑながら、
『まあ、貴方は何處から來たの。私が欣一さんの妻ですよ、夜夜中に他の家へ押しかけて何のお話をしてるんです、早くお歸りなさい』
由美子は悸乎として身を退いたが、我知らず反抗の情がむら〳〵と込上げて、
『いゝえ欣一さんに奥樣はありません、私の方が先にお友達になつたんですわ』
『いゝえ貴方なんぞ知らない女です』
『貴方こそ、立川で私と欣一さんと仲好くして居たのを知らないんだわ』

二人は眞青な顏をして激情した眼に涙を湛へ、身を顫はしながら睨み合つて居る、欣一は什麼して可いかと當惑した樣な眼で、まじ〳〵と二人を眺めた。と、此時又も梯子段の音がして障子がサッと開くと、思ひ掛けない母の悦子の姿が其處に現はれた。
『由美さん、まあお前は何といふ事です！あれほど禁めて置くのに、何時の間にか私の目を竊んで恁那所へ來て居るんですね、さあ直ぐにお歸りなさい』
由美子は驚いて母を見上げて、何か言譯しやうとしたけれども喉が塞がつて言葉が出ない。
『何をぐず〳〵して居るんです、お立ちなさいてば』
『お母樣、ま…待つて頂戴』
『可けません、お歸りなさい！』

母は遮二無二引立てやうとする。由美子は振放さうと爭ふけれども、母の手は全で鐵の輪の樣に彼女の手首を痛いほど握り緊めて居るので、一生懸命に身を踠いて、

『お母樣、何卒放して‥放して下さい！』と思はず聲を上げて叫んだ‥‥

自分の聲に驚いて由美子はハッとして眼を覺ました。今迄顯々と見たのは凡て夢で、其身は矢張り寢具の中に包まれて、苦しく魘されて居たのである身中にびつしよりと汗をかいて、胸が聞える程の音を立て、動悸して居る。

薄暗い山村の二階も、青白めたお歌の顏も、欣一や母の姿も、眼覺める瞬間に掻消す樣に消えて了つた　彼女は外して居た枕を仕直して、ホッとした樣に胸を抑へながら茫乎と四邊を眺めた。けれども、今欣一と會つた事だけは何だか夢ではないやうに顯然と心に殘つて居る。而して『貴方は私の良人ですわ』と云つた言葉を偶と思ひ出した。夢の中にもせよ、今日まで良人な

ぞと云ふ事を考へたこともない由美子は、

『まあ、私は什麼して彼那羞かしい事を言つたのだらう』と、獨で仄と赧らめた顏を布團の襟に隱した。そして、襟の蔭で柔かな微笑が口元に浮んだ。

十一

麗かな日和が續いて、今年は毎もより早く春が來た。駿河臺の裏町にある山村の家の狹い庭にも、桃の莟が處女の乳房の樣にふつくりと紅らんで、障子を明け放した座敷の疊の上までも溫かい日光がほか〱と射し込んでゐる緣側に丸くなつて午睡をして居た隣家の猫が、眼を覺まして暢々と欠伸をして、兩方の前足を丁寧に舐めてからノソリ〱と庭に降りて行つた。

午砲はもう餘程前に打つた。母子が簡單な晝飯を濟ましてから、母のお政は又裏に出て殘した張物をして居たが、軈て其れを終つて、やれ〱と云ふ

樣に濡手を拭きながら茶の間の長火鉢の前に坐つた。お歌は其處の茶簞笥の傍の暦や石版畫を貼つた壁際に凭れて、隣家の小母さんから賴まれた小供の頭巾を一心に編んで居る。白い嫋やかな指が釣針と一緒に器用に編物の上にあやなされると、膝の前の赤い毛糸の珠がコロ〳〵と轉がる。

お政は長煙管を取つて暢かに一服吸ひながら、

『本當に好い日和だことね、恁那に温かいと張物をしても什麽に樂だらう、ぽか〳〵して汗が滲む位だよ』

『私も羽織を脱いだの、もう全かり春ですわね』

『九段や日比谷の梅が盛りでせうよ、什麽にか賑やかだらうね』

『私明日幸田さんと一緒に日比谷に行くお約束をしたわ』とお歌は顏を上げて莞爾して、『ねえお母さん、行つて可いでせう』

『爾々明日は彼の方のお休みだからね。ぢやお母さんは一人でお留守番なの』

『ほゝゝ』とお歌は明るい聲で笑つた。『だけれども、幸田さんと私と二人では何だか可笑しいわね』

『什麽してさ』

『だつて、男と女ですもの、人が何とか思やしないか知ら』

お政はフカリと烟を吐いた口に微笑を浮べながら、

『何と思つたつて可いぢやないの、寧そお前幸田さんの奥さんにして頂くと好いわ』

『あら厭だ、お母さんは』とお歌はホツト顏を赧らめて、手に持つた編物で隱した。『何いわ、お母さん迄其那事云ふなら私もう明日行かないから可い』

『ほゝゝゝ、云つたつて可いぢやないの。いゝえね、私冗談に云ふのでないのよ、本當に爾思ふの、幸田さんは彼那に溫和しい優しい方だし、物事に熱心だから屹度末には出世をなさるよ。だからね、お前も緣付くなら、彼いふ

方の奥さんになれば幸福だらうと思ふのさ』
『いゝえ、駄目よ』
『何故駄目なの』
『だつて幸田さんは私なんか嫌ひですもの』とお歌は云つた。其實欣一が自分を嫌つて居るとは決して思はなかつたけれども、只羞かしさにカッとして無暗に爾云つて了つたのだ。
『いゝえ、其那ことは無いだらう』とお政は眞面目に考へる樣な眼をして、『彼の方だつてもお前なら氣心も知れてるんだし、厭とは被仰らないかと思ふよ。お前が承知なら、何時か機を見て私からお話をして見やうよ』
『あら厭だわ、其那事を幸田さんに云ひなすつては』とお歌は耳の根までも赧くなつて肩を搖すつた。
『何故、可いぢやないの、お母さんがお話をするのに些とも羞かしい事はあ

りやしないよ』
『だつて〳〵可けないわ、もう一年位經つてからにして頂戴』
『ほゝゝ、一年經てば可いの』
『えゝ……』とお歌は微かに頷いて見せた。極りが惡いから其場免れに一年なぞと云つたものゝ、心の中では母が早く其事を欣一に話せば可い、而して欣一が何と云ふか、其の答へが聞きたい樣な氣がする。何となく心がソハソハして、お歌は幾度も編物の目を間違へては獨りで顏を赧らめながら、口元に含笑んだ。
其時、表格子がガラリと開いて、
『やあ、お政は家に居るかい』
元氣な聲をかけて入つて來たのは、お政の良人の直衞であつた。夫婦別れをして此處へ移つてから、一度も顏を見せたことの無い彼れがひよつくりと

やつて來たので、お政もお歌も意外な顔色して其の姿を見た。
『あはゝゝ、何も俺が來たからとて吃驚することはないよ、久し振だな、何だか他人の家へ來た樣だ、はゝはゝゝ』
　流石に極りの悪いのを紛らす樣に直衞は高笑ひをしながら、火鉢の傍に寄つてどつかり尻を据ゑた。
『いやお互に無事で結構だ、お歌全かり見違へる樣になつたな、さあ是は土產だ』と、手にぶら提げて來た折詰の樣なものを娘の前に出した。例の垢染みた糸織の羽織を着て、縒々になつた縮緬の兵兒帶を巻き付け、相變らず何處かで飲んで來たと見え、赤い顏をして襟が體止なく廣がり、薄黑い莫大小のシヤツの釦がぶらぶらして居る。そして火鉢の縁にグラリと凭れかゝつて酒臭い息を吹いた。
　お政は眉を顰めて、

『何か用がありましたの』と苦い顏をして訊ねた。
『まあさ、其那に厄病神でも逐拂ふ樣に云ふものではない、今日は福の神のお使だよ、はゝゝゝ、話は緩くりとして、まあお茶の熱いやつでも一杯淹れて呉れ』
『お茶を上つたら歸つて下さいよ』
『まあ可いつてことよ、酒を飲まうと云やしないから。なあお歌、お前の事で素晴しい話があるんだ、さあ其の蓋を開けなさい』
　折詰を差付けられたけれども、お歌は逡巡して手を引込めて居る。此の父の放埒から山村の家產を滅し、其の爲めに母や自分が今の不幸な境遇に落された事など、日頃母から聞されて居るので、妙に警戒する樣な打解けない顏をして直衞の樣子を見詰めた。けれども久し振で父に會つたので、流石に懐かしい心地もする。

『遠慮する事はないよ』と直衛は自分で折詰の蓋を開いた。中には小鯛の鹽燒や、卵子燒やきんとん。筍と蒲鉾の煮たのなどが詰つて居る。

『是は小川町のときわの料理さ、灰谷さんの息子を知つてるだらう、あの圭次郎さんに今一杯飲まされて來たんだ。彼の人も若いのに似合はない氣が利いて居らアね、歸り際に是非持つて行けと是を詰めさせて寄越したのさ』と彼れは芥子漬を摘み出して口に入れながら、お政の出した番茶をシユツと啜つた。

『貴方は灰谷さんと懇意にして被居るんですか』と、お政は不審らしく訊ねる。

『懇意だとも、此方へも常磐津の稽古に來るそうぢやないか』

『偶にはお出でなさるよ』

『什麽だお歌、お前は圭次郎さんを何う思ふか』と、直衛は娘の心を探るやうに水を向けた。

『私彼那方のこと何にも知りませんわ』

『だが、あの人を嫌ひではあるまい』

『毎時でも私の顔をジロ〳〵見て種々な事を云つたりして、何だかイケ好かない人よ、ねえお母さん』とお歌は卒氣もなく答へる。

『はゝゝゝ、詰らない事を』と直衛は笑つて、『實はねお政、圭次郎さんがお歌を嫁に欲しいと云ふのだ。其れで俺は相談に來たのさ』

『え、お嫁に……』とお政の意外な顔をするのと、『まあ厭だ！』とお歌が叫ぶのと一緒であつた。

『いや聞きなさい、惡くない話だよ。彼の人は甚くお歌を懇望で、支度金まで出すと云ふんだ、其れも少しばかりぢや無い、五百圓、此方さへ承知なれば直ぐに渡さうと云ふのだよ』

　お政は『又好い加減な事ばつかり』と云はぬばかりに、全で取合はない樣子をして煙草を吸つて居る。

『俺も娘の事だからな、恁うして別れては居るものゝ蔭で心配をしてるのだお歌も最う、エヽと幾歳だつけ……』と直衞は娘の齢を忘れて一寸惑ついたが、『何しろもう好い娘だから、そろ〳〵縁組の事も考へなけりやならない其處で……』

『止して下さい、其那醉拂ひの管なんぞ聞きたかありませんよ』

『管だつて、馬鹿を云つちや可けない、大事な縁談の話だ。其れに俺も此節は全かり改心して、酒を禁めて了つた』

『ぷッ……』とお政は噴笑して、『其れで禁めたと云ふんですの、プン〳〵臭つてるぢやありませんか』

『是か、あはゝゝ、いや今日は特別だ。圭次郎さんの御馳走だから仕方がな

い、何しろ芽出たい話だから、俺もつい景氣よく飲んで了つた譯さ』

『什麽ですか、貴方の口が當になるもんですか』

『ぢやお前が一つ圭次郎さんに會つて見なさい、先方では大層急いでるのだから早い方が可いよ』

　お政は霎時默つて居たが、稍心を動かされた樣に、

『一體什麽いふお話ですの』と改めて訊ねた。

『今云ふ通り支度金が五百圓、話の決り次第此方へ渡すと云ふのだ。實は去年の秋頃から幾度も返事の催促を受けたんだが、俺が此方へ顔を出し惡いものだから、ヽヽつひ延々になつて居た譯さ。先方では最う金まで丁と用意をして待つて居る。此通りだと今日も百圓紙幣で五枚、俺の前へ見せたんだから間違ひの無い話だよ。其りや元の山村なら五百圓の金が珍らしくもないが、お互に今の境涯では、恁那旨い縁談が又と舞ひ込む氣遣ひはありやしない。え

えお政、是非灰谷さんへお歌を嫁る事にしなさい』
『爾ですね　』とお政は烟管を膝に置いて考へ込んだ。
『厭よお母さん、私彼那人嫌ひだわ』と、お歌は傍から無邪氣に拗る樣に肩を搖つた。
『まあお待ち、什麽お話なのか能く聞いて見やうよ、どうせお前も何處かへ緣付かなければならないのだから』
『だつて厭よ、私知らないから可い』と、お歌は不安らしく父と母の顏を見た。そして何と思つたか、編物を持つた儘ふいと立つて勝手の方へ出て行く。
お政は微笑しながら娘の後姿を見て居たが、止めやうともしなかつた。直衞は骨張つた手で赤い鼻を撫でて、それから土瓶を取つて自分に茶を注いで飲みながら、
『なあ、此節五百圓の金を欲しいたつて吳れる人はありやしない』と、勿體

らしく云つて『俺も實は熟々考へたのだ、お互に恁うして何時まで別れて居たつて詰らない話だから、矢張り一緒になつて、何か手堅い商賣でも始めやうと思ふのさ。五百圓ぢや些と閊ッたるいが、其れ丈纒まつてあれば、まあ取付きの資本には成らうと云ふものだ』
『だつて、其のお金は支度金と云ふのでせう』
『其れは名目さ、正直に嫁入支度をする位なら、五百圓が千圓貰つたつて有難くはありやしない。究り五百圓を、娘を貰ふ印に親達への貢と云ふ譯なんだ、支度なぞ何にもしなくとも可いのだよ』
『だけども、豈か着たきりでも遣られないでせうからね』
『着たきり所か裸でも結構と云ふのだ、何しろ圭次郎さんの方ぢや大變に望んで居るのだから、彼あいふ處へ行けばお歌も可愛がられて幸福だよ。なあに金だつて、此方が欲しいと云へば未だ二百や三百は否と云ふ氣遣ひはない』

『まあ、貴方は直ぐに其れだから……』
『いや慾張る譯ぢやないが、商賣の資本は多い方が好いからな。お歌も滿足に嫁づけて了へば、後は俺達二人の生活だけだ、俺も酒は禁めるし、これで手堅い商賣でもやれば此の先氣樂に暮らせるだらう、俺の口だから信用が出來ないかも知れないが、もう若い者ではないし俺も熟々先が心細くなつた、はゝゝゝ意氣地が無くなつたよ』と直衞は額を抑へた。酒が醒めて來たので小皺の目だつ顏が何處か淋しく分別らしく見える。
お政も、此の直衞の不爲體に愛憎を盡かして意氣張りに別れては居るものの、何彼につけて心淋しさは感じて居る。高が常磐津の師匠ぐらゐで何程の收入があるではなし、不足がちな生活をして居るよりは、寧そ爾いふ縁談のあるのを幸ひに娘を嫁づけて了つて、直衞が本當に手堅い商買でも始めて呉れるなら、其の方が安心かとも思つて見た。で、自然に彼れの言葉に心を動

かされた。
『其れが本當のお話なら私も考へて見ませうよ』と、お政は倘疑ひの色を見せながらも打解けた調子で云つた『彼の娘も未だ縁談を急ぐことも無いけれども、何うせ家に置いて養子を取ると云つた處で望む樣な人は來ませんから他所へ嫁つた方が好いかとも思つて居ますの。ですから、灰谷さんから其那お話があるなら至極好ささうに思ふけれども、さあ彼の娘が何と云ひますか知ら……』
『お前さへ承知なら、お歌に否やのあらう筈がない』
『でも爾一概にも決められませんからね、兎も角も一寸彼の娘の心持を聞いて見ませう』
『若い娘に我儘をさしては可けないから、お前が能く聞かしてやりなさい、何しろ其れが決まれば今日にも圭次郎さんは金を渡す筈だから』と、直衞は

獨りでニコ〳〵した。

『まあ、貴方はお金の事ばつかり』とお政は嗜める樣に云つた。そして、いそ〳〵立つて勝手の方へ出て見たが、其處にお歌の姿がないので、

『おや、何處へ行つたのだらう』

水口の障子を開けて裏口を見廻したけれども、其邊に居る樣子もない。大方小母さんの許ではないかと、垣根一つ向ふの隣の家へ二聲三聲呼んで見たが矢張り返辭がない。

『什麽したと云ふのだらう、可怪しいね』と、お政はもう一度其邊を見廻しながら不審らしく首を傾けた。

火鉢の傍では、酒の醒めた直衞が頰杖を支いて頻りに胸算用をして居たが水口から流れて來る午後の薄寒い風に、ぶる〳〵と襟元を慄はした。

十二

お歌は編み上げた子供の頭巾を隣家へ屆けて、何だか家へ歸るのが厭だつたので、鼻緒の弛んだ汚い水下駄を突つかけた儘裏口から竊と町の方へ出て了つた。父が持込んで來た緣談や相手の圭次郎の事などを考へると、お歌は何と云ふ事なしに厭で〳〵ならない。母が何と返事をするか知れないが、若しや承知でもしたら什麽しやうと胸騷ぎのする程心配になつて、終ひには悲しくなつて來る。

『彼那人のお嫁になんか誰が行くものか』と心の中に力を入れて呟いて見たが、父と母の相談が出來た時には何としやうと云ふ取決めた考へもない。胸の中は遣瀨ない樣にワク〳〵して、只『什麽しやう〳〵……』と同じ事を繰返すばかりである。

『私もう此儘家へ歸るまいか知ら』お歌は爾も思つた。
不意に車夫に聲を掛けられて吃驚して道を避けながら、其の車に乘つてる人を偶と圭次郎ではないかと思つて、胸をドキリとさした。中折帽を冠つた頭の後付が能く似て居る樣な氣がして、若しか自分の家へ緣談の返事を催促に來たのかも知れないと、お歌は暫く其處に立つて見送つて居た。然し車は我家の方へ橫丁を入らうとせずに、其儘眞直に行つて了つたのでホッと安心した。
電車通りの人の往來の中を、お歌は每時も眼に付く小間物店や吳服屋の飾窓にも振向かうとはせずに、歩くともなくフラ〳〵と歩いて行く。偶と氣が着いて立止まつた時には、何時の間にか神保町の角に來てゐた。
『まあ、私何處へ行く意りなんだらう』と、お歌は自分ながら怪しむ樣に四邊を眺めた。其れと定めて來た譯ではないが、實は欣一の出勤して居る錦町

の活版所の方へ行く意りだつたのを思ひ出した。然し、工場へ行つた所で時間中に面會は出來ないだらうし、活版所の人達に變に思はれたり、顏を見られるのが急に恥かしくなつて、お歌は躊躇した。
空には薄雲が涌き出て、急に寒い風が町を流れる。西日は黃色く屋根の上に射して居るが、町並には最早や電燈が點つた。人や電車が忙しく往交する中に、夕刊賣は種々な新聞を地面に重ねて、一枚づゝ手捷こく疊んで居る。お歌は電柱の傍に佇んで茫やりと其れを見て居た。
『歌さん、何をしてるの』
輕く肩を叩かれたのでハッとして振向くと、欣一が莞爾して立つて居る。
『おや幸田さん、もうお歸り』と、お歌は彼れの顏を見ると急に嬉しさが充溢になつて、縋る樣に傍に寄添つた。そして何となしに顏を赧らめて、
『今日は每時より早いことね、私先刻から待つて居ましたのよ』

『一時間ばかり早退けです。歌さんは買物にでも來たんですか』と欣一は云つたが、其れにしては普段着の儘で肩掛もしないお歌の姿を、稍不審らしく眺めた。

『いゝえ、私默つて家を出て來たの』

『什麽したんです』

『だつて本當に厭なんですもの、私どうして可いか分らないわ』と、お歌は美しい眉根を曇らして遣瀨ない顏をする〻平生から素直な氣立のお歌が恁那事を云つて默つて家を出るなどと云ふのは初めて見る事である。で、欣一は益々不審に思つて、

『什麽したんです』と前よりも眞面目な調子で訊ねた。

『今日ね、私のお父さんが不意に家へ訪ねて來ましたの、そして……そしてあの』とお歌は云ひ淀んで、『私を他家へお嫁にやると云ふんですもの』と極

惡りさうに俯目になる。

欣一は默つて彼女の顏を見た。二人は小川町の通街を緩々歩いて行く。お歌はひつたりと男の傍に寄りながら、先刻父が持込んで來た緣談の事を話した。先方は欣一も見たことがある筈の灰谷と云ふ男である事、五百圓の支度金の事、そして父が乘氣になつての話に母までも動かされて、何うやら承知しさうな樣子である事など、お歌は訴へる樣に話して、

『私お嫁に行く事なぞ厭ですわ、死んだつて行かないわ』と聲を顫はした

欣一は何と云つて可いか分らぬ樣に、矢張默つて居る。

『ねえ幸田さん、什麽したら可いでせうね、貴方什麽かして頂戴、其れでなければ私もう家へ歸らないことよ』

『然し、其那事に僕が口を出す事は出來ませんよ、お父さんやお母さんの云ふ通りに任して置くが可いでせう』と欣一は重い口で云つた。

『だけれども、私厭ですもの』
『厭と云つたつて、女は嫁に行くのが當然ぢやありませんか』
『厭です〳〵』とお歌は拗ねる樣に肩を搖すつたが、其の眼には涙が浮んだ。
『何故其那に厭ですか』
『他家へお嫁に行けば、もう幸田さんと一緒には居られませんわ。是迄の樣に種々な樂しいお話も出來なくなるわ』
『其れは仕方がないでせう、僕も歌さんに行かれると淋しいけれども、孰れ何時か一度は別れなければならないのだから』
爾云ふ彼れの顏をお歌は凝と見詰めて、
『まあ、貴方は隨分ですわねえ』と恨めしさうに云つた。『可いわ、可いわ、貴方が其那に私なんか些とも構つて下さらないなら、私死んで了ふから可い』
お歌はホロ〳〵と涙をこぼした。欣一は困つた樣に口を噤んだ。お歌の悲

しさうな言葉や興奮した樣子を見ると、其の縁談がよく〳〵彼女の心に染まぬだらうと察しられる。然し、欣一はお歌の悲しみに同情しながら、彼女の深い心を察することが出來ないのだ。お歌は彼れを戀して居る、其れを彼れは知らない。只優しい素直な娘として親しんで居る迄である。
お歌は袂を顏に當てゝ歔欷あげた。
『まあ其那に一途に云つても仕方がないです』と、欣一は霎時して宥める樣に云つた。『貴方が其れ程厭だと思ふなら、能くお母さんに話して縁談を斷れば可いでせう』
『駄目よ、駄目よ』とお歌は泣きながら首を振つた。『お母さんは屹度無理に私を灰谷さんへ行かせますわ。ですから‥‥ですから幸田さん、後生ですから私を助けて頂戴』
『其那に灰谷さんが厭なんですか』

『彼那人、顔を見ても胸が悪いわ。私は、幸田さん一人が頼りなんですから貴方にお別れすれば何にも樂しみが無くなつて了ふわ。……ね……ね、幸田さん、貴方は私を愛して下さらないの』

『そりや、そりや僕だつて……』と、欣一は往來の人を憚る樣に四邊を見ながら、『歌さんの爲めには出來る丈けの事をする意りですよ。ぢや可いです、歌さんが斷つてもお母さんが承知されなかつたら、其時は僕から云つて上げやう、譬へ親だつて、無理に娘を結婚させると云ふのは間違つて居るからね』

『それでは、貴方が屹度力になつて下さるの』

『可いですとも、だから心配しないでお居でなさい』

『えゝ心配しませんわ』と、お歌は涙に濡れた眼を拭つて莞爾した。

二人は話に氣を取られて一歩づゝ運びながら、何時の間にか駿河臺への曲り角を通り過ぎて了つた。欣一は氣が着いて立ち止まつた。

『おや、大變に來過ぎたゝ、さあ最う家へ歸りませう、日が全かり暮れて了つた』

『最つと彼方へ歩きませう、私家へ歸りたくありませんの』

『然し、僕は腹が空つたです』

『私お腹なんか些とも空きませんわ、貴方と二人で何處迄でも行つて見たいわねえ』とお歌は沁々と云つた。そして欣一の手を緊かりと握つて居た。

町は何時しか黄昏の色に浸されて、店々の電燈が華やかに輝いて居る。ニコライ會堂の晩鐘が莊嚴な淋しい音に鳴り始めた。欣一は、尙も澁つて居るお歌を賺したり勵ましたりしながら、漸く駿河臺の家へ歸つて來た。

直衞は今し方立去つて、お政が一人座敷の方で片附け物をして居たが、格子戸の音を聞いて直ぐに玄關に出て來た。

『まあ歌さんも一緒なの、什麼したかと思つて先刻から本當に心配したんだ

よ』
『私、幸田さんをお迎ひに行つたのよ』とお歌は悄れた聲で云つて、母の顔も見ずにツイと緣側の方へ行つて了つた。
『爾々、幸田さんお手紙が來て居ましたつけ』
『はあ有難う』
お政が差し出す封書を欣一は受取つて、大方立川の父からの音信か、それとも猪之吉からであらうと懷しく思ひながら、表書を見ると目馴れぬ女文字である。不審な眼で裏を返して、『島崎由美子』とあるのを見た時、彼れの顔には忽ち抑へ切れぬ微笑が浮んだ。で、其儘懷中に入れて二階に上り机の前に坐つて直ぐに封を披いた。
手紙は奇麗な用箋に、細かい優しい字でスラ〳〵と書いてある。
欣一さん、隨分しばらくね。私先日猪之吉さんから貴方の事を聞いて、

本當におなつかしく思ひますの。明日は貴方のお休みでせう、私貴方のところへお訪ねしますわ。一年ぶりでいろ〳〵な樂しいお話をしたいし、第一に少女の畫を見せて頂きたいの、大變に能く出來たんですつてね、早く見たくて〳〵ならないわ。明日おひる過ぎになるかも知れないけれども、何處へも行かないで屹度待つて居て下さい、私本當に樂んで居ますの。さようなら。
欣一さま　　　ゆみ子
欣一は懷しさと嬉しさに胸を躍らせながら讀んだ。一語一語に彼の無邪氣な、快活な、愛らしい由美子の姿が目に浮ぶ樣な氣がする。彼れは輕い微笑を唇に湛へて、二度も三度も讀み返した。

十三

九段の靖國神社の境内の梅は最早や六分方蕾を破つて、萬朶の梢は柔かな白玉を飾つた樣に花に誇つて居る。麗かな梅日和の一日が靜かに暮れかゝつて、夕方の風につれて淸しい甘い香が幽に苑內を流れる。賑つて居た遊散の群も次第に去つて、何時となく人影の疎になつた頃、梅林の間を緩々と社殿の裏手の方へと來るのは欣一と由美子であつた。

昨夜手紙で約束した通りに、由美子は今日の午後に駿河臺の欣一の許へ訪ねた。立川の多摩川堤で親しくなつて以來一年振に逢つて、二人は懷かしく樂しく種々な話をしたり、欣一の描いた少女の畫を見たりして、時の經つのを忘れて居た。軈て由美子が心附いて暇を告げようとするのを欣一は途中まで送る意りで、一緒に此の靖國神社まで連だつて來たのである。無論由美子

は學校の友達を訪ねる樣に母の前を言拵へて來たので、身裝も學校行きの銘仙の着物に紫の袴を着けて、羽織だけは絣の入つた派手な立縞のお召のを着て居た。其のしなやかな袴と羽織が、スラリと背の伸びた彼女の姿に好く似合つて非常に優美に見える。其れと並んで行く欣一の方は洗ひ晒しの紺絣の綿入に羽織、安物の鳥打帽を冠つて居るので、由美子に比べて餘りに無骨で見窄らしいが、元より彼れは裝なぞに少しも心を留めなかつた。身裝や境遇が何うであらうと、今恁うして由美子と一緒に歩いて居る彼れの顏は愉快に輝いて、悅ばしい心地が胸の中に溢れる樣に思つた。

由美子も樂しさうに笑顏をして、欣一と並びながら護謨草履の足を輕く運んだ。

『それでは、此處でもうお別れしませうか』と彼女は偶と立ち止つて、『此處からは最う近いから私一人で歸られるわ』

『未だ可いぢやありませんか、由美子さんは其那に氣が急くの』
『いゝえ、爾ではないけれども………』
『お母さんに秘して來たから心配になるんですか』
『えゝ、餘まり遲くなると可けないのよ』
『未だ遲くなりやしないさ、太陽は彼處にあるよ』
西に傾いた日は梅林を透かして、町並の屋根の上にキラ〳〵と輝いて居る欣一は其れを指しながら、
『ね可いだらう、最少し此處で遊んでから別れませう。今度又逢ふのは何時か知れないんだから』
『それは爾ね』と、由美子は和しく首を傾げて含笑んだ。
何を話したいと云のでは無いけれども、欣一は此儘彼女と離れるのが殘惜しい。由美子も別れたくなかつた。で、二人は又緩々と足を運んで池のほとりに來た。其處には未だ梅見の人達が彼方此方のベンチに憩つたり、樹の根に蹲んで池の中の緋鯉を眺めたりして居る。噴水はシュッ〳〵と音を立てて噴き上つては笠の樣に散亂する、其無數の水玉が一つ〳〵に夕日を反射して黄金の玉の樣に煌めく。池の向ふの岩組には常盤木の間に咲いた梅の花が一入水々しい美しさを誇つて、梢の下を流れる水の上にヒラ〳〵と花片を零した。
二人は成丈け人々と離れたベンチに腰を下ろした。
『まあ好い匂ひがして來るわ』と、由美子は爽々しさうに眼を細くして、
『ね、梅の花の匂ひが玆邊一ぱいに流れてる樣だわね』
『此の匂ひを吸ふと僕は氣が清々するよ』と、欣一は帽子を脱つて、晴々しい顏をして鼻を蠢めかす。
彼れの襟の上に散つて來た花片を、由美子は輕く摘み取つて愛らしい唇

に當てながら、

『私花の中で梅の花が一等好きよ、櫻は綺麗だけれども恁那に好い匂ひがないんですもの』

『そりや櫻より品位があつて床しいね』

『梅には鶯が止まるけれども、櫻には何にも止まらないでせう』

『蝶が止まるさ』

『いゝえ、蝶々は菜の花よ』

『菜種に飽いたら櫻に止まれと云ふぢやないか』

『ほゝゝ、飽いてからだから駄目よ』と由美子は無邪氣に笑つて、『ね欣一さん、私梅の花の様な女になりたいわ』

『梅の花……』と欣一は首を捻つて、『然し梅の花は冷たい感じがするからね僕は由美子さんは薔薇の花だと思ふよ、妍やかで匂があつて、そして愛らし

いから』

『あら、其んな……』と由美子は顔を赧らめて嬉しさうに莞爾した。

恁那無邪氣な話をして居る間にも、二人は言ひ知れぬ樂しさと親し味が胸の中に溢れる様に思つた。欣一は是迄も時々由美子の事を懐しくは思つて居たが、今日の様に深い親し味を感じやうとは思はなかつた。立川で逢つて居た時よりも、二人の心持は今日一日に二倍も三倍も親しい情で結び付けられた。由美子の方は一年の間殆んど思出すことも稀であつた位だのに、彼れに對して恁那に慕はしい情が什麽して自分の心の中に潛んで居たらうかと不思義のやうである。其れは恰も鳥の卵が凝つと温められて居る内に、何時の間にか羽の生えた雛鳥になつて、不意に殼を破つて舞ひ上る様に、由美子の胸の中に此の深い愛情が知らず〳〵の間に暖められて居たのであらう。

欣一は柔かに輝く眼で由美子を見た。以前は只無邪氣に愛らしい少女との

み見て居た彼女の姿が、今は全く別の美しい優しい娘として欣一の眼に映つた。而して、其れが一層彼れの心を引付けるのであつた。

『僕は今日は本當に愉快だ』と彼れは心から樂しさうに云つた。『由美子さん能く僕を忘れなかつたですね、僕は東京に來てから什麽かして一度逢ひたいと思つて居たんだが、到頭逢ふことが出來たんだ。人といふものは不思議な者ですね』

『本當に不思議ですわ、私是からだつて貴方の事は何時迄も忘れないと思つてよ』と由美子は心深い眼で彼れを見上げた。

『けれども、立川に居た時の樣に自由に逢はれないから詰らない』

『欣一さんのお休みの日には私何時でも訪ねて行くわ、そして最つと〳〵親密になりませうね、私何だか幼さい時からズッと貴方とお友達の樣な氣がしますの』

『僕も』と欣一も力を入れて云つて、『それに、僕は東京に來ても友達と云ふのは外にないんだからね、男では猪之さんと、女では由美さんだけが僕の心から思つて居る親友なんだ』

『でも、お歌さんがあるでせう』と、由美子は探る樣に含笑んだ。

『爾歌さんも優しい娘だけれども、あれは只宿の娘だから僕は親しくして居るだけですよ』

『だけれども、毎日一緒に被居つて什麽に樂しいお話も出來るし、私お歌さんが羨ましいわ』と、由美子は輕い嫉妬の色を浮べながら云つた。

『親しいと云つたつて、由美子さんと歌さんとは全く別さ』

『什麽別ですの』

『それや歌さんは只優しい娘だから好きだけれども、由美子さんは……僕は……僕は、何と云つて可いだらう、口では云はれないけれども僕は……』と

欣一は微かに顔を赧くして、口吃つた。そして、其の口に出して云はれない心を眼に現はしながら由美子を見詰めた

　其の情の籠つた男の眼を凝と見て、由美子は何となく顔を赧らめた。溶け合ふ様の温かい心持が、自づと二人の胸から胸へ流れた。ポッと上氣した様な由美子の顔は梅の花よりも美しく輝いて、柔かな樂しさうな光が眼の中に溢れて居る。欣一は吸付けられる様に暫らく彼女の顔に見惚れて居たが。軈て彼れは偶と不安な色に顔を曇らして、

『然し・考へて見ると僕は情ないよ。什麼に由美子さんを親しく思つた所で由美子さんは立派な富豪のお孃さんだし、僕は此通りの詰らない人間なんだから』と溜息を漏らした。

『其那こと構はないぢやありませんの。家が什麼だつても二人の心さへ合つて居れば、私達は何時迄も親しくして居られますわ』

『だつて駄目だ』と欣一は首を振つた。『今に屹度別れなければならない、僕は爾考へると、矢張り由美子さんに逢はない方が可かつた樣に思ふよ』

『まあ厭だわね、何故其那詰らない事を考へなさるの。そりや欣一さんは今は苦學生ですけれども、五年か六年經てば屹度立派な畫家になれることよ、文部省の展覽會に出して特選を取つて頂戴、ね、ほゝゝゝ爾したら什麼に名譽でせう』

『今から五年經てば僕は二十四になるんだ』

『二十四ばかりで展覽會に出れば、それこそ天才だわね』

『由美子さんは幾歳だらう』

『私　』と由美子は丸い軟やかな指を押つて、『二十一になるわ、ほゝゝゝ』と綺麗な齒を見せて笑つた。

『ぢや、其頃は由美子さんは何處へ行つて了ふか知れないんだね』と欣一は

詰らなさうに云ふ。

『あら、什麼して』

『何處かへお嫁に行つて了ふでせう、爾でなければ家で結婚をするか、何方にしても僕と最う逢はれる樣な事はありやしない』

『いゝえ、私結婚なんかしないことよ』と、由美子は心もち顏を赧らめながら首を振つた。

『だつて爾は行かないさ』

欣一は現にお歌が心に染まない緣談を兩親から强られて居る事など考へ合して、由美子も今に自分から去つて了ふだらうと思ふと、胸が壓付けられる樣に情ない氣がする。彼れは不安な目をして膝の上にヒラ〳〵散つて來た梅の花片を見詰めた。

『いゝえ〳〵、私結婚なんかしませんわ、何時迄も欣一さんのお友達よ』と

由美子は力を入れて云ふ。

『然し、女はお嫁に行かなければならないよ』

『私行かないわ、欣一さんが成功して立派な畫家にお成りなさる迄、私待つて居るわ。ね、五年でも七年でも私何處へも行かないと心に決めて居るの』

和しい情の籠つた由美子の顏を、欣一は凝と見て居た。と、軈て深い感激の色を眉の間に浮べて、

『由美子さんは其那に僕の事を思つて呉れるの』と微に顫へる聲で云ふ。

『えゝ本當よ』

『由美子さん、僕は……僕は屹度成功して見せる、什麼に苦學をしたつて今に日本で有名な畫家になるよ』と彼れは兩手で胸の上を抑へて、希望に燃える樣に眼を耀かした。

由美子は莞爾して頷いて、

『ほゝゝゝ、早く其時が來れば可いわね、私什麼に嬉しいでせう』
『本當に由美子さんは待つて居て呉れるんですね』
『えゝ、屹度私お約束するわ』
欣一は唇に浮んで來る微笑を抑へることが出來なかつた。水の上に散つた花片に戯れる鯉が、不意に直ぐ前でザブリと跳ねたので、二人は吃驚した樣に池の面を眺めた。そして顔を見合して莞爾した。水に煌めいて居る夕日は次第に薄れて、苑内の電燈が何時しか光を持つた。
此時欣一は手を懷中に入れて、シャツの裡を　つて居たが、小さく紙に包んだ物を取り出して膝の上に開いた。其れは彼れが東京に出立する時に、父の和尚から渡された指輪――浮彫の波形は純金で、其れに白金の千鳥を飛ばし、中央に小豆程の眞珠を嵌めた彼の指輪である。
『由美子さん、是は僕の死んだお母さんの形見なんだ』と、彼れは掌に載

せて今更の樣に懷しげに見た。
『まあ、奇麗な指輪ですこと』と由美子も珍らしさうに眺める。
『だから僕は何時でも身に着けて、今日まで一度も離したことはない。是を僕は由美子さんに上げやう』
『え、私に……』と由美子は驚いた樣に眼を瞠つて、『其那大切な物を私が頂いては可けないわ』
『由美子さんが僕の代りに藏つて置いて下さい。指輪なんか由美子さんは幾つも持つてるだらうけれども、是は僕の贈物なんだから、而して僕のお母さんの魂なんだから決して誰にも見せない樣に。ね、可いの』
心深い欣一の顔を見て由美子は稍躊躇して居たが、につこりと笑みを見せて、
『爾、有難う、それでは頂いて大切に藏つて置くわ』

『一寸篏めて御覽、僕が篏めて上げよう』
欣一は由美子の白い軟やかな藥指に指輪を篏めてやつた。そして、指輪の篏つた其手を滿足らしく眺めた。由美子も嬉しさうに含笑んだ。
『由美子さん、僕の心は分つたの』
『え〻、私忘れないわ』
二人は顏を見合した。何時の間にか手と手が緊かりと握り合されて居た。

十四

欣一が由美子を送つて行つた跡に、お歌は寂しい思をして駿河臺の家に殘つて居た。今日は欣一と二人で日比谷公園に行く心算で、折角樂みにして居たのに、由美子が訪ねて來た爲めにお流れになつて了つた。お歌は非常に失望したが、然し欣一を恨みもしなければ由美子を憎いとも思はなかつた。のみならず、由美子が來た時には自分も一緒になつて、三人が隔意のない樂しい話に笑ひ合つたり、餅菓子や果物などを自分に買つて來て歡待したりした。
『本當に氣のさつぱりした優しいお孃樣だ』お歌は爾思つて、始めて逢つた由美子にも心から親しい味を覺えた。けれども、欣一と由美子が連だつて出て行つた跡、何となく自分一人取り殘された樣な賴りない寂しい心持に沈みながら、裏口に出て垣根際に佇んで居た。麗かな午後の日光がホカ〳〵と空地を照らして、隣家の垣越しに突き出た梅の梢にも優しい花が咲いてゐる。
其れを見るとお歌は日比谷行きの事など思ひ出して、此處に自分獨りぼんやりと立つて居るのが妙に悲しくなつた。『私は什麼しても幸田さんと別れたくない、何處へもお嫁になんか行くのは厭だわ』と思ふにつれて、灰谷の緣談の事を考へ出すと身の竦む樣に厭で厭でならない。彼那男の所へ自分を緣付ようとする父や母の心が、恨めしく腹立たしい樣な氣がして、我知らず涙

が眼の中に浮んだ。『それにしても欣一さんは私の事を什麽思つて被居るだらう』と心配になつて、寧そ自分の心の有りたけを打出して、彼の方の答へを聞いて見ようかなど〻様々な思が其れから其れと胸を暗くするのであつた。

座敷には稽古の人が來て居るので、母のお政の三味線につれて、男の拙い調子外れの唄の聲が聞える。

『ほんに嫌ひも夏木立、アノ柳湯へ行くたびに、氣休め口を眞に受けて、夫と思うて染め浴衣、ま〻に鳴海の比翼紋、末は互にどうして、かうしてと、辛氣しかくも女氣の、明けて言はれぬ胸の內、察して呉れたがよいわいな　』

お政の三味線に引ずられて、鵞鳥が首を絞められる樣な聲で一生懸命にやつて居るのを聞くと、お歌は譯もなしに氣が焦々して來る。『寧そ家を脫け出して何處かへ行つて了はうか知ら』と、其那捨身のやうな心も湧いて來た。

霎時すると三味線の音が歇んで、客を送り出す氣配がした。と、勝手口の障子を開けてお政は顏を出して、

『おやお歌さん、其處に居るの、一寸お出でなさい』

『何か御用ですの』とお歌は振向いた。

『あ〻、少しお話があるから』

お歌は默つて不承々々に內に入つた。お政は茶間の長火鉢の傍に坐つて烟管を取り上げながら、娘を其處に坐らせた。お稽古をした後の一休みと云ふ風に暢かに一服吸つて、湯氣の立つ香ばしい番茶を啜つた。

『お前もお茶をお上りよ、おせんでも買はうかね』

『い〻え、欲しくないわ』とお歌は氣のない返事をする。

『ほ〻〻什麽したの、元氣がないぢやないの』

『何だか私氣が鬱々するのよ』と、お歌は鬢のほつれを煩さ〻うに掻き上げ